
インギア

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インギア

【Zコード】

N4812A

【作者名】

佳生

【あらすじ】

人間と人形、そのどちらでもある機融人。人形が隠れながら生きる街で、若き統率者達は、理想の街を創り上げる事が出来るのか。

いつだつたか。

私が生まれる、ずっとずっと昔のこと。

ある一人の人間が、人間の人形を創りました。

一人が人間そつくりな人形を、一人が人工の頭脳を。 そうして、人形が自分で考えて動けるようにしたのです。

しかし、人間は彼らの事を道具の様に扱いました。

人間よりも様々な事をこなし、体も丈夫な彼らを、人間はなく人形としか見なかつたのです。

人間と同じように、感情を持つ彼らを道具として扱うことは、自身を道具として扱うに等しいということに気付かず。

『人対機戦争』

私達がそう呼ぶ戦争は、読んで字のごとく、人と機械、人と人形の戦争を表しています。

創つた者と創られた者。

その二つの間に起こつた戦争はたつた一年で、それだけの期間で終わりを告げました。結果は人形の全滅。

しかし、本当は人形が負けた訳ではないことを、誰もが知つています。

この戦争で負けたのは、人間でも人形でもなく、双方が住む、土地そのものでした。

水は干上がり、木々は焼け、大地には大きな穴があき、山は崩れ、谷は埋まり、村や町もことごとく壊れ、全てが消えたようでした。ですが、これだけならば、人形が敗北した理由にはなりません。なぜならば、人形は食料が無くても生きていくことが出来るからです。

人形が敗北したのは、その後に起きた災厄のせいでした。

人間達が後退していくなか、無益な争いに嫌気がさしはじめた人形達が駐屯していた、まさにその場所に、落雷があつたのです。

とても大きな落雷で、それは紫に輝く冥界の剣のようだつたそうです。

自然が人間の味方をしたことを証明した瞬間に、人形は全滅していました。

落雷の衝撃、いえ雷撃のせいで、人工の頭脳が再起不能なほど、ダメージを受けてしまったのです。

人工の頭脳を取り替えることが出来れば、何も問題はなかつたのですが、それを行なえる人形も、敵を助けるような事をする技師もいませんでした。

それでも。

それでも、生きているのです。存在しているのです。私達、人形は。

……必死に。

第一話・拾う歯車 花屋

縦に長い建物の間を、少年が一人、息を切らせて走っている。

今、少年は生きるために逃げている最中だった。

なぜ自分が殺されそうになつたのか、全くわからないのだが、黙つていれば殺されてしまう。

少年は逃げるしかなかつた。

まだ死にたくはない。

だから命をかけて走っていたといふのに

「いたぞーっ！！」

「！？」

少年の頑張りも虚しく、堀を乗り越え、地に足を着いた瞬間、丁度路地を曲がってきた男に見つかって、大声を出された。

無慈悲に響く声に、少年の心臓が止まりそうに冷え、同時に死への覚悟が決まる。

少年がまだ若い命を手放す決心を固めかけたときだった。

「こちらに、いらっしゃい」

さきほど自分が乗り越えた堀の上から“春”的な声と共に、白い手が伸ばされていた。

驚いて半歩後退した少年だったが、堀の上にいた青年が余りにも穏やかに微笑んで手を差し伸べるので、少し警戒しながらも、その手をとつてしまつた。

目の前の眼鏡をかけた穏やかそうな青年が、果たして信用の置ける人物なのかわからないのに。

自分の手をつかんだ少年に、青年は笑いかけると、一気に堀の上ま

で持ち上げて、細い細い道の上に立たせる。

「着いてきて下さーね」

暖かく穏やかな声に、少年は何となく安心して、塀の上を青年に着いて行く。

その際、青年の長い髪が目に付いて、少年は何度か目を擦つた。そうして気が付いたのは、青年の結わえられた髪が、金髪だということだった。この街で、少年は金髪の人間や人形を見たことがない。ほんやりと見とれていると、金色が急に視界からずれて、少年は驚いた。

実際は青年が塀を降りただけなのだが、少年はそれに気付くまで数秒の時間を要するほどに金色に魅せられていたようだ。

青年が降りたのは、この街では珍しい、縦ではなく横に広い建物の前で、その屋敷の軒先には色彩りの花が笑顔で並んでいる。花なんて眺めるのはいつぶりだろうか。

少年は今の今まで、この無機質な街の中に花屋があるだなんて知らなかつた。

「あら、ゼオンさん？ 今日も晴れましたなあ」

「はい。ところで、まだ場所は空いてますか？」

「ああ、空いてますよ？ 後ろの坊やのことなら、『心配なく』

ゼオンという名前らしい青年と会話をする、若い和服の女性。空いてるとか心配ないとかよくわからない話をしている。その女性が、上品に微笑んで手招きをした。

「さ、坊や。こっちに来て隠れなさい？ また恐い人に見つかってしまうさかい」

しかし、少年はゼオンの後ろにつつ立つたまま、動こうとしない。大人を警戒しているのか、イントネーションの違う言葉や、この街にはありえない花屋という空間に怯えたのか、少年はゼオンに背を押されても、それ以上、動くことはなかつた。

- 1 -

そんな少年の頑なな様子に、ゼオンも女性も困つて顔を見合わせるだけで、どうすること出来ない。

こんな時、無理矢理に連れていいくことが一番良くないのだ。

セスンも彼女も、空が、元通り立ち継ぎに並ぶ。話ではない。

どうしたものかと悩んでいたところに、花屋から小柄な人影が出てきた。

「スミレさ~んっ！！

あからさまにゼオンと少年に反応した彼は、
軽い足取りでチョコンと二人の前で立ち止まる。

一見 女の子と見間違えそうになんと 口惜な容姿の彼は 七
まさこ、小鳥のよつこ。

「僕、ティオつていうんだ。」お兄さんがゼオンで、お姉さん
がスミレさん。……君は？」

近づいてくるなり、自己紹介を始めた赤毛の可愛い子に、少年は一度大きく瞬きをして、キヨトンとティオを見つめた。

ティオの方は、慣れた様子で、笑顔のまま答えを待っている。

「斗牛」

「ユキ？」

「うん」

少年・ユキの声は、とても小さかった。まだ気が気でないようで、不安そうにゼオンとティオを交互に見ている。

ゼオンはティオと目が合つと、柔らかく微笑んで、今度こそユキの背を押してやつた。

同時にティオがユキの手を掴んで、店の中に連れていく。店の中に入ってしまえば大丈夫だろう。

同じ境遇の子が数人、大人も含めれば、十数人はいるはずだ。

「……」苦労さまです

話題を探すように、ゼオンが苦笑する。

「はい、『苦労さま』でも、お互い様ですやろ?」

店の前が一人きりの空間になつたところで、双方の表情は一様に暗くなつた。

心なしか、花も元氣がないように思える。

「最近、多くなつてきますなあ。

…本当に“人形狩り”なんてこと、するんですやろか」

「そうなつてほしくありませんけど…否定できないのが辛いところです」

花屋の女主人スミレの口から出た“人形狩り”といつ単語に、ゼオンは辛そうに瞳をふせる。

それが今の、街を取り巻く状況。

“人形狩り”というのは、読んで字の“ごとく、人形を狩る”ということで、その昔、戦争で敗北した人形の残党を撲滅しようという行動だった。

それが近々、本格的に動きだそうとしているらしい噂が、真しやかに囁かれている。

もし、それが本当なら、この街は大変なことになってしまふ。なぜなら“人形狩り”的対象となつている者の全てが人形ではなく、本来“人形狩り”的にいるべき、機融人、なのだ。

‘機融人’というのは、機械と融合した人間のことで、存在 자체が人工の人形とは全く違う。

対象となつてしまつた機融人は、他の機融人と違い、体の大半を機械で維持していた。

なので、“人形狩り”的方でも見分けがついていないのだ。人形だつたら狩られてもいい、という訳ではないが、それにしても、この状況で“人形狩り”が動き出したりなどすれば、ただの殺し合いになつてしまふ。

そうなつてからでは遅いのだ。だからこそ、ゼオン達のような若者が立ち上がりざるをえなかつたのだろう。

ゼオンは、今でこそ
“反人形狩り・インギア”的存在だが、実際はどこにでもいる極々普通の青年なのだ。

髪が金色で、少々人より体が強いだけで…。

「……こりしていても、仕方がありませんね。私、家に帰ります」

暗い顔で沈黙したまま立つていていた無駄な時間を悔いるように、ゼオンは苦笑してスミレに礼をした。

スミレもゼオンに同意したのか、軽く表情を崩して、店の中に戻つてゆく。

花が風に揺れる音を聞きながら、ゼオンは塀を飛び越えた。

“人形狩り”が動き出したら、自分達は一体どれだけの人を救えるのだろうか。

第三話・拾つ歯車 濃腕技師

街の外れにある、正方形の箱のような木造の家。

そこがゼオンの唯一の領域だった。

こちらまことにした住居の中は、見た目よりもすつきつしてて、以外と明るい。

絵の具と薬瓶が混雜している棚が、家の片方に寄つて配置され、その下には紙やキャンバスが並んでいた。

そのせいか、彼の家は絵描きならではの、独特の香で満ち、その中にそこはかとなく花屋から貰い受けた花が咲き誇つてている。

ゼオンは、その中で女神と向き合つていた。

ゼオンと同じ、金の髪の女性。

この家には似付かわしくない、美しい装飾の施された額縁におさめられた女神は、柔らかな朝日のように微笑んでいた。

その微笑みこそが、今までのゼオンを街につなぎ止めていたもの。

女神の加護があるからこそ、自分はこの街で暮らせん…と、少なくとも本人はそう思つてゐるようだ。

「……ちい～す。ちよつと開けてくんね？」

ゼオンはその音で意識を現実に引き戻すと、慌てて扉を開ける。トントンとこつこつせ、ドンドンとこつ音で、誰かがゼオンの扉を無遠慮に叩いた。

ゼオンはその音で意識を現実に引き戻すと、慌てて扉を開ける。
そして、鳴を飲んで驚いた。

「な、薬貸して薬。出来ればタオルも」

「どうしたんですか？ ああ、取りあえず中に入つてー。」

「！」のまんま入つたら、家の中には血がたれるやつだ。

「いいから入つてーー！」

「…………はー」

バタンッ！

扉の前にいた短い黒髪の青年を、無理矢理に家の中に入れたゼオンは、すぐさま青年にタオルを渡す。

「いやー、悪いな。ビックリしただろ？」

渡されたタオルで傷口の額を抑える青年は、数少ないゼオンの友人だった。

彼は一流の技師として慕われている反面、“人形狩り”には要注意人物として警戒されている。

おかげでこの街ではそこそこ有名だった。

千里のスゴウ。

それが、彼の別称だ。

「……こんなに血が出てますよ？　田の方は大丈夫なんですか？」

傷薬をもつてきたゼオンを、スゴウはキュインツと作り物の瞳を作動させて笑みを浮かべた。

「心配すんな。擦つてすらねえよ」

傷口からタオルを外したスゴウは、ゼオンの持つてきた薬を自分で傷に塗り込む。

いつも思うのだがそんな乱暴な塗りかたをして、痛くはないんだろうか。

「…………つ、しみる～……！」

「だつたら、もつと優しく塗ればいいじゃないですか」

嘆息するゼオンに対し、スゴウは痛みに顔をしかめながら、

「しみた方が、よく効いてるよつた氣分になるじゃねえか」

などと言つ。

苦笑するゼオンは、薬の塗り終わつた傷口に、ガーゼをあてて、テープで止めてやる。

それから、事の次第を聞こいつと、スゴウと対面する位置に椅子を動かして腰掛けた。

「で、どうしたんですか？ その傷は」

出血の量にしては、案外浅い傷だつたか、場所が急所だけに、ただ事ではなかつたのだろう。

菩薩の「」とき笑顔のゼオンを前に、スゴウは逃げることなどできなかつた。

「……実は、ジャックとはちあわせしてな」

「ジャックと? よくその程度ですみましたね」

「…………お前、俺のこと馬鹿にしてんのか? 俺がジャック¹ときに裂かれる訳ねえだろ? が」

その自信は一体、どこからくるのか。

ゼオンは呆れてしまつて言葉が出ない。

スゴウは視線をそらして、ガーゼをいじる。

「確かに、ちつたあ、危ねえとは思つたけど、負ける気はしなかつたぞ」

悔しいが、スゴウのその意見は、決して過大評価ではない。

知らぬところで同士を壇やしている《反人形狩り》だが、ゼオンが知るかぎりでは、一番腕利きで最強なのはスゴウなのだ。

それは対抗勢力の《人形狩り》から目を付けられるほどもので、ジャックにも劣らない。

「あいつと俺の違いつて、殺すか殺さないかぐらいしかないんじや

ねーの？俺は殺しなんか、まっぴりこめんだね

肩をすくめるスゴウに、ゼオンは今朝の新聞記事を思い出す。

旧文明の怪人甦る。

その昔、人間の女を殺し回った『切り裂き屋・ジャック』神出鬼没の殺人鬼のことく、本日の事件についても、証拠も目撃者も皆無であった。

手口は残虐であり、筆舌に尽くしたくはない。

「んな、姿はやっぱ見えなかつた……一生の不覚！」

街に出没した殺人鬼と遭遇したところに、彼はあくまでも普通である。

「程々にして下さこよ」

嘆息するゼオンに、スゴウは笑つて返す。

分かっているのか、いないのか。

その内、

「これが彼の最後の笑顔でした」

なんて事になりそうで、ゼオンは心配でしうがない。

当の本人は

「心配はかけてるけど、迷惑はかけてねえだろ」

と、屁理屈を言い、全くおとなしくしてくれないのだ。

これではゼオンもどうしようもない。

困り果てた表情のまま、ゼオンが座ると、向かい合ったスゴウが、深刻な面持ちになつて、手を組み合わせる。

「ジャックに遭つたのは、びっくりハプニングだからいいんだ、別に。問題はそっちじゃねえんだ」

「と、言つと?」

スゴウは困がいいだけではなく、情報も早い。

確實せいのある情報は、すぐにスゴウに伝わり、ゼオンへと届けられる。

その速さで、街の誰しもが『人形狩り』に賛成している訳ではない事がうかがえる。

それは、街の最高権力者も、同じ事だったようだ。

「街長の息子が動いたぞ」

「彼は、確か」

「ああ、奴は《イン・ギア》派だ。親父を引きずり落として、街長になつたらしいぜ。公表はされてないが」

「……………ですか」

少しばかり、肩の荷が下りて、ゼオンは表情を綻ばす。

スゴウも笑いかえすが、油断はできない。

「つつても、《人形狩り》は、もうでっけえ組織になつてゐる。今更、街の政策で押さえ切れるかどうか……」

「無理、でしうね」

「だよな」

「しかし、大見え切つて行動も出来なくなるでしょう。私たちには、協力者が多いですから」

にこりと笑うゼオン。

《人形狩り》が考へてゐるよりも、《イン・ギア》に賛同するもの

が多い。

スゴウのように、顕著な人物の方が少ないのだ。

人形と勘違いされた人を、捕まえた振りをして、花屋まで連れていくのが、《イン・ギア》本来の姿。

《人形狩り》を蹴散らすような、力強いメンバーはスゴウくらいの者だ。

「さて……どうしますか」

腕を組んだゼオンの瞳が、眼鏡の奥で細まる。

スゴウも同じく、腕を組み、瞳を閉じた。

「父上つ……」

ドバンツ！

と、扉を壊す勢いで、街長室に入ってきた息子に、街長は大きく肩を跳ね上げた。

「何をお考えなのですかっ！ 『人形狩り』など……いつまで、過去を引きずるおつもりなのですか！？」

何の迷いもなく歩より、街長の大きな机を叩いた息子に、街長はただ立ちぬく。

「今やるべきは『人形狩り』ではなく、海側の防波堤の強化、旧文明の驚異を取りのぞき、滞っていた市場の治安回復の問題を片付けることです！」

バンバンバン！

と机が叩かれるたびに跳ねあがるインクジボと息子の形相に、街長

は言葉もでない。

今、街長を叱咤している青年は、その名をルークと言つた。

刃のような鋭い瞳と、外へ跳ねる癖のある硬質の長い髪は、結わえられもせずに背に流れている。

常日頃から、書類の処理や整理をしていたルークには、街の財政は筒抜けだ。

それに加え、ルークは正義感が強いので、この状況を黙つて見ている訳にはいかない。

悠長にしていられない状況なのは、ルークだけでなく街長も分かっているはずだ。

今までこの街を治めてきたのだから、分からぬほうがおかしい。

「『人形狩り』など、愚考の極みつ！ 人形も人間も、その間で生きる者も、同じ同志であると分からぬのですか？ 今までこの街を支えてきたのは、人間だけですか？ ここまで街が発展できる基盤を作り上げたのは、街民であり、人間だけではない事に、よもやお気付きにすらなつていないのでですか！？」

いつしか自分から視線を外し、街の見渡せる大窓の外に視線を移した父の背を、ルークは険しい表情で見つめる。

父の考えが分からぬ。

「…………もう、決まつたことなのだよ、ルーク」

「父上…………！」

街を見下ろしながら、街長は他人行儀に言い放つた。

驚愕し落胆したルークを余所に、街長が話を勧める。

「だから、ルークを養子に出す事にしたんだ」

その一言は、ルークの思考を停止させるのに、十分なものだった。

ルークとは、ルークの六歳年下の弟のことだ。

ルークはある事故によって、脳に多大なダメージを受け、表現力や言語力の殆どを失つてしまつた。

更に、損傷した脳を補うために、一部を機械化せたのだ。

「な、なぜ、ルークを養子にする必要があるのです？ ルークは人形じゃない！！」

私情で声を荒げた息子に、街長は僅かに驚いて、ルークを振り向く。

「何をそんなに慌てているのだ？ アークにはJリJではなく、もつと自然の溢れた場所で療養して……」

「嘘だ！ 父上、嘘をつきましたね？ 父上はアークを殺すつもりなのでしょう！？」

「な……」

瞳を見開いて、冷や汗を流す父を、ルークは射殺すように睨み付ける。

「今まで、貴方は何度、アークとお出かけになりましたか？ 僕は、全部知っていましたよ。だから、もう貴方はアークに触れさせない」

そう低く言ったルークの瞳には、決意とともに暗い色が瞬いている。

ゆつくりと一歩ずつ確かめるように近づいてくる息子に、街長の手は、机の一番上の引き出しに伸びていた。

そこには、常に拳銃が入っている。

ルークはそれを知らない。

「…………そつか、だからか

呴いた父の言葉にも、ルークの歩は止まらなかつた。

街長の手は、拳銃を掴む。

「邪魔だつたのは、お前だつたのか？ ルーク」

「あ…………ー？」

轟いた銃声に、ルークの体は跳ねるようにして、倒れた。

驚きに見開かれた瞳のまま、ルークは天井を見つめ、起き上がるうとはしない。

熱を持つた肩が、徐々に痛みを訴え始める。

反射神経を最大限に發揮した結果の負傷は、それでもひどく、肩を中心には液体が速いスピードで滲んでいっているのが分かつた。

撃たれた衝撃に体が驚いてしまつていて、上手く動かす事ができない。

一瞬、本気で父親に殺されるとも考えたが、そつはならなかつた。

「ルーク？ 気をしつかり持ちなさい」

優しくも凜とした声に、微睡みかけていたルークの意識は覚醒する。視線を動かすと、扇子を手に持ち、細身のドレスを身につけた女性が、自分の隣に立っていた。

「は、母上……？」

それが母だと気が付くのに、僅かな時間要した。

緩く巻かれた、柔らかな髪は自分の髪よりも色素が薄い。

いつも微笑んでいる表情が、そこにはなかつた。

パチリ、と扇子が閉まる音が、ルークの耳を叩く。

「あなた、全部、聞かせていただきましたわよ？」

上目遣いに夫を睨み付ける彼女は、口元を扇で隠す。

ルークは母の言葉に、最初から見てたのか、と恨めしく瞳を閉じた。撃たれる前に、出てきてほしかった。

「あなたが『人形狩り』に資金を流していたのも、アークを疎まし

く思っていたのも、ルークが反人形狩りの《イン・ギア》とやらで陰ながら支援していたのも、全部、知っていますよ?」

見透かすような彼女の視線に、街長の額に脂汗が滲み始め、手から拳銃が落ちる。

その音はルークの耳にも届いた。

「やはり、父はあなたを見誤っていたのですね

ほう、と嘆息する母の前に、漸く動けるようになつたルークが底うよつて立つ。

ポタポタと伝う血が、絨毯に点線を描いた。

「ルーク、無理はいけません。ここは母に任せて休んでいなさい。もうすぐ、お医者さまがいらっしゃるわ」

「そこまで分かっていたなら、もっと早く出てきておればよいのに……」

「お医者さまは保険です。ルークほどの剣士ならば、あれ位は避けられると思つていたのだけれど……」

「無理です」

息子を過大評価しそうだ、ヒルークはふりつぶ足を叱咤しながら、苦笑する。

「あなたには、この家から出ていたっていただきます」

「！？ だが、街長は…………」

「！」心配なく

扇を扉に向け、瞳を細める母を見て、ルークは青ざめた父を睨んだ。狼狽えるように、街長、といつ職にしがみ付こうとした夫の言葉を、彼女はピシャリと遮る。

この街の長は、選挙などではなく、代々一つの血筋から選ばれる。

ルークの家庭において、その血筋を引いているのは、母の方であり、父は入り婿であった。

よって、一番権力があるのは街長である父ではなくて、母なのだ。

「街長は責任を持つて、ルークが引き継ぎますわ

「母上。 それも無理です」

「お黙り」

「…………はい」

彼女には誰も勝てない。

「荷物は纏めさせておきました。 車を一台さしあげますから、お好きな場所にお行きなさいな」

母が言い終わると同時に、使用人の男が一人、街長室に走り込んできた。

間髪入れずに父の両脇を掴んで、部屋から引きずりだす彼らを、そして父の叫びを、ルークは茫然と眺めていた。

最後に、父が何を言つていたのかは分からぬ。

しかし、ろくでもない事だつたのだろうとは予想が付いた。

「…、…………ふう」

辛そうに息を付いたルークの肩に、慈しむような母の手が添えられる。

「「」みんなさいね、もう少しのしんぼうだから

「大丈夫ですよ、」れぐらい

笑いながら、ルークは自分の限界を誤魔化していた。

出来る事なら、今直ぐにでも意識を失いたい。

しかし、そんな事をしたら、母がこれ以上に傷ついてしまつかもしれない。

意識を失わないように、そんな事を考えながら、ルークは座り込む。

その時、丁度、半開きになっていた扉が、ゆっくりと開いていっているのが見えた。

余りにゆっくりとした、その速度にギョッとして、ルークはぎこちなく動きをとめ、扉を凝視する。

「…………」「い、さま」

「アーク！？」

ずるずると、足にシーツを絡ませたまま歩いて来たのは、ルークに良く似た髪質の、表情に元氣い少年だった。

ルークより母よりの色の髪は、もとから跳ね気味であつたのに加え、寝起きだったからか、更に跳ねている。

「ん」

差し出されたシーツだったが、ルークはただ受け取り、使い道に悩んだ。

何の意図が働いたのかが分からない。

「痛い」

「ん、ああ」

単語を呟いただけだが、自分に尋ねているのだろうとルークは解釈した。

そのアークの手が、シーツの端を掴み、ルークの肩へと向かつ。

「ん」

ルークの肩の向こうに伸ばされた手はシーツの端を離し、脇から伸びた手がその端を掴んで引いた。

そうすると、丁度、傷口にシーツが巻かれたような形になる。

「やつ、やつよ。怪我をしたら包帯を巻くのよ」

۱۰۰

心なしか満足した表情のアークは、そのまま、つまづくまるよつこして、ルークの足に頭を乗せる。

枕代わりされた足と、いきなり眠りだした弟に、ルークは驚きつつも苦笑した。

あの日から、何時もそうだ。

「ここらかまわす眠りだすくせに、
ルークがいると必ずその近くまで
移動してきて、また眠るのだ。」

なので、兄弟の寝室は幼いころと同じく、同室になっている。

「早く、一人で眠れるようになれよ」

外見は十三歳に成長した、六歳前後の弟を愛しく思いながら、ルークはその頭をなでた。

それから直ぐに医者が到着したのだが、アークが眠っていたおかげで、診察から治療までを、そこですませる羽田になった。

「…………無理しないで」

「い、え。弟を起こしたくないんです」

「でも、痛いでしょ？」

「…………はい」

そんな会話が行なわれていた事を、アークは夢現つに聞いていた。

しかし、記憶には残らない。

もう一度、アークは夢を見るために目を閉じた。

第五話・拾つ歯車 切り裂き魔

街の中で、最も人通りのない路地にて、異様それは、下に通路の通つた橋の上に座り、ぼんやりと空に浮かぶ、黄金の月を眺めていた。顔を隠す長い前髪は、瞳を刺すような金色で、適当に切り捨てられた後ろ髪より僅かに短い。

前髪で、十分に顔は隠れているといふのに、赤い布が目隠しのようになに幾重にも巻かれていた。

しかし、その隙間から片目だけが覗いており、その瞳の色は青い。

「ま～じょが現れ、言いました～」

よく見ると、それは小さく唇を動かし、何かを呟いていた。

それは歌で、童謡のようだつたが、聞いたことはない。

「『可愛い貴方を人形に～』。金のま～じょが言いました～

歌う気などまるでない歌声は、虚ろに路地にこだまする。

「人形、箱の中につけ～、ま～じょはお家に帰るのさ～。 もつと

大きな玩具箱、人形たくさん持ってきて遊んでしまって、また遊ぶ。人形フラフラ踊つてゐる」

ぶらぶらと足を動かしながら、それは歌を続ける。

「ある日玩具の箱が、開かなくなつて、人形たちちはゅつくりと、箱の蓋を開けました。まゝじょが、ずっと遠くからこちらに走つてきています、人形びっくりしましたが、蓋が閉まらず溢れだす、そしたら箱が揺れだして、は、こからみんな、落ちちゃつた。下には釜戸がありまして、箱ごと皆、燃えちゃつた。だから、まゝじょは泣いちゃつて、涙で炎が消えました。そこから焦げた人形があ、一人這い出て言いました……」

それの空氣のような歌声が、止まつた。

月を見上げて、口の端を上へと上げる。

「『まゝじょさん、貴方は魔女ですよ。女神じゃなくつて、魔女で、』」

人形しゃべつて逃げてつた、魔女が恐くて逃げてつた、

くすくすと、笑い声を上げながら、それは月に向かつて手を伸ばす。

月を掴みたい、というよりは、誰かに手を掴まれるのを期待しているかのような手の形だった。

月の光すらも眩しそうに、それは瞳を細める。

「燃えちゃつた……ま～じょも一緒に燃やされて、逃げた人形、ただ一人、コラコラフラフラヨタヨタと、魔物の街にやつきてた～、ま～じょは燃えて、にんぎょも燃えて～、燃やした炎は燃やした炎～」

ぐつ、と握り締められた手の平は、直ぐ様橋の柵に叩きつけられる。口は相変わらず笑みの形のまま、瞳の青だけが、ギラギラと光を放つていた。

「魔物は、みいんな、狩つてやるよ……僕は大丈夫さ。人形だもの。丈夫だから、大丈夫だよ。あんたが作つた人形だもの、魔女さん」

月に話し掛けるそれは、にこり、と微笑んで、橋の上から飛び降りる。

六メートルほどの高さから、それは音もなく着地し、それはゆつたりと歩き始めた。

コラコラフラフラヨタヨタと……。

酔いが回っているのか、少々頬に朱色のさした女性が、裏路地を歩いていた。

露出度の高い上着とミニスカートは、彼女によく似合っている。

「そこのお嬢さん」

微酔い気分でいた彼女は、小さく微笑んでそちらを向いた。

そこにあるのは、暗い路地裏と、今し方、声をかけてきたであろう誰かの手の平。

まるで人形のように形のいい白い手は、その先にある秀麗な顔立ちを想像させるのに、十分であった。

「ああ」

そう言つて手はさりに彼女に伸ばされる。

そして彼女は……

＋ ＋

翌日、新聞を開いたゼオンは、表情を険しくし、下唇を噛んだ。

また女性が一人、ジャックの手によって殺されてしまった。

『人形狩り』は人形を狩り、『切り裂き屋』は人間をかる。

だったら『イン・ギア』はどうすればいいというのだろう。

人形狩りを阻止するのは『イン・ギア』

多くの人間の協力がなくては存在できないのも『イン・ギア』

ジャックは現れてから、一週間で、すでに十数人の女性を手にかけている。

町中の人間を殺しきるかのようなスピードだ。

しかし、街の住民はただ恐れるだけで、何もしない。

何も。

はあ、とため息を付いて、ゼオンは新聞を置む。

「どうして、いつなるのかな」

その弦きは、誰にもとどかない。

額縁に飾られた金の女神は、そんなゼオンを、優しい微笑で見つめていた。

第六話・拾う歯車 白い人形姫

無機質な壁に囲まれた、それでいて広いその敷地は、青い芝生と多
彩な花々によつて彩られていた。

その中で、白髪に銀の瞳の女性が、これも白い上品を片手に、バラ
の手入れをしていた。

結われた髪と、肩の露出した黒の上着には、大きめのバラの花の飾
りが付けられていて、どこかのお姫様のようだ。

しかも、その髪と瞳が作り物のようで、人形に見えなくもない。

彼女は、日の光が苦手だった。

なので、今は日が沈んで間もない、といった頃だ。

「ししょー

「あ、ティオー！」

丁度、門に様子を見にいこうとしていた時、その門の向こうから、
赤毛の一見女の子に見間違えそうになる少年が走ってきた。

後ろには、黒い短髪の天才技師で《イン・ギア》の、スゴウが付い
てきている。

「今日はゼオンじやないんだ」

「よ、ツヒナ。今日はゼオンじやなくて俺。新しい技手の話しひきた。ガゼローフィるよな」

「うん。もとと夕食作つてると想つ。食べてく~。」

「じやあ、お言葉に甘えて」

やつ言いながら一カリ、と笑つて、スコウは家の中に入つていつた。

「わい、じや、やひつか」

「はい、よろしくお願ひしますー。」

白い上田を、花壇を囲つ煉瓦の上に置いて、ツヒナはティオに微笑んだ。

ティオは腕を捲り上げ、構えをとる。

清楚可憐に見えるツヒナだが、実は武芸の達人であり、それを活かしてティオの師匠などもかつて出る、戦姫であつた。

この場所以外には、花屋にいくぐらうしかしないので、街の中では余り有名ではない。

そうでなくとも、最近はジャックの出現で、若い女性のシホナは夜間歩く事ができない。

もし、誰も止めなかつたら、夜の散歩を続けていたかもしだれないが、「君が出ていつたきり帰つてこなかつたら、不安と絶望に押し潰され、死ぬから……」

などと言われてしまつては、いへりマペースなシホナも従わざるを得ない。

「もう少し踏み込んで大丈夫。…………うん、そうだね、円が乱れな」よひ。やう、そんな感じ」

「うつやつー」

ティオの繰り出す、素早く流れるよひな手の平や蹴りを、同じよひにして交わしながら、シホナは優しく指導する。

「うふ。…………ヒヤア、そのまま、流れを変えて、うふ。足の運びに気を付け…………あ」

「うえ…………ヒヤア、うつやつー」

シホナが注意を促した瞬間、それを聞き終わるか否かの時に、ティオが左の足につま付いて、見事に転げた。

下はN生なので、無傷ではあるのだが、痛い。

「いてて」と、ティオが正直に口に出して言つと、ツェナがティオに手を貸して、少し休むことになった。

始まつてそんなに時間は経つていいが、毎回気紛れに休憩するので、ツェナもティオも気にしてはいないようだ。

ほんやりと、様々な花の植えられた園を見ながら、一人は座り込む。

「じしょー、じしょーってガゼローフさんの事、どつ思つてゐるんですか」

「え？ うーん、お料理作るの上手いなーとか、髪の結い方上手いなーとか？」

「髪、結つてもひつてゐるんですか……？」

「うん」

キヨトンと首を傾げる彼女は、果てしなく純粋だ。

友情から色恋ざたに発展していくタイプだらつ。

「後はーそんせつ、何かに付けて、『死ぬ』つて単語を使つたがるんだよ。駄目だよつてこつのに」

「それは知っています」

ガゼローフという人は、そういう人なのだ。

絶望しきつた暗い表情で、思い付きのように死のうとする、一層愉快な人なのだ。

ただ、止めてやらないと冗談でなく、本気で自殺を遂行するのがたまにあります。

その時は、ゼオンとスゴウの処置によって一命をとりとめたが、彼らが居なかつたら、確実に死んでいただろう。

「ていうか、そもそも何で、しょーの家にいるんですか」

少しばかり尖った物言いに、ツェナは苦笑して聞き返す。

「いたら、駄目かな？」

「いえ、そういう訳じゃなくて…………しょー、女人の人だし、ガゼローフさんは男の人だし…………」

「ああ、そういう事」

後半、口の中でモーモーモーモーモーしたティオに、ツェナはほん、と手

を打つ。

彼女自身、そしてガゼローフも気付かなかつた意見だ。

そんな事、一度も考えなかつた。

「たぶん、大丈夫だよ。私、強いし」

「…………ああ！」

なぜかそこで納得するティオ。

確かに、一本背負いか、巴投げでもかまして、事無きを得そつだ。

「それにガゼローフさん、そういう事、考えるよりも、もつと考えることがあるから」

「考えること？」

「自分が絶望する要素とか…………」

「暗ツツ！」

「そういう人だもの～」

笑つて答えるツェナは、ただその意味だけで、その単語を使つてい

る。

そこに恋愛感情はない。

そもそもツェナとガゼローフが出会った切っ掛けは、夜の散歩を途中、ツェナが川を放流していたガゼローフを助けた事に始まった。

川の上流から、ずっと流れてきたようで、あちこち傷だらけで瀕死の状態だった。

話を聞いてみると、街よりも（死ぬ確立の高い）山の方が自分にあつてゐる気がして、山の洞窟で暮らしていたところ、洪水と土砂崩れのダブルパンチにあり、川を流れていたそうだ。

何とも哀れな話である。

その前から、自殺願望的感情は天性的にあつたらしいが、はじめの頃は本気で困った。

凄まじいまでの被害妄想に、ゼオンすら失笑していた。

そんな彼と、対等に会話してみせたのがツェナである。

彼女のおかげで、ガゼローフが優れた人形師である事が分かり、彼が『イン・ギア』に協力してくれるよつになつた。

ツェナが居なければ、凄腕技師と鬼才人形師のタッグは見られなかつただろう。

「お~い、ツェナ、ティオ、飯だつて~」

「は~い~。」

リビングの窓から顔を出したスゴウの呼び掛けに答えて、ツェナが立ち上がる。

続いてティオも立ち上がり、ズボンに付いた葉っぱを払う。

余り稽古はできなかつたが、いつもこんな感じだ。

ゆつくりとそれでも強くなつて『いる自分を感じながら、ティオは、リビングの扉を開けた。

そこでガゼローフが持つていた包丁を叩き落としたスゴウを見て、ティオとシオナは苦笑して席に着いた。

そこにはガゼローフの絶望仕切つた表情からは想像も付かない、華やかに色とりどりの料理が、美味しいそうな香を漂わせていた。

第七話・拾う歯車 陰鬱人形師（前書き）

今までとは少し違う感じのキャラです。苦手な人がいるかもしれません。

第七話・拾う歯車 陰鬱人形師

ツェナに笑つて答えてから、スゴウは高床式の別荘のような家の中に足を踏み入れた。

いい匂いと、何かを刻む音が聞こえる。

ガゼローフが夕飯の支度をしているのだろうと、スゴウは迷う様子もなく、左に曲がり、リビングに向かつ。

案の定、ガゼローフが鬱々とした表情で野菜を切っていた。

補足しておぐが、別に料理を造るのが嫌な訳ではない。

彼の表情は、常にこれだ。

「よう、何作つてるんだ?」

「……野菜、サラダ」

「へえ。今日、飯食わしてくれるつてツェナがいってたぜ、よろしく

く

「……不味かつたら絶対言つて。死んで詫びるから」

「ぜつてえ、言わねえ」

「うこうう奴なのである。

ティオよつは短く、スゴウよつは長い黒髪は表情をより暗く見せる
為にあるよつで、紫闇の瞳は、地獄を見てきたかのよつに輝きが無
い。

死んだ魚のよつな田、とでも言つんだらうか。

「………… できたら、料理をテーブルに置いてほしいな」

ぼそつと言つた言葉が聞き取れず、スゴウは

「あ?」

と、常のしかも低い音で言つてしまつた。

はつとしても遅い。

「じめん。 自分の仕事を人に頼むなんて……自分の厚かましさを
恥じて、死なせていただき…………」

「うおおおあつ…… や、やめろつ包丁、向けるのは、野菜にだろ
つ……」

俎板の上に手を乗せ、包丁を振り上げるガゼローフを必死に止め、
スゴウは言われた通りに料理をテーブルへと並べる。

ある種の脅しと化している彼の自殺的願望だが、あれは紛れもなく
彼の本心だ。

止めなくては、彼は本当に死んでしまつだらう。

最近聞いた、ガゼローフの過去に、それは由来している。

「義手の話……飯食つてからにするか？」

「どちらでも……」

「じゃ、後で」

希望と言つ文字を、彼は過去に置いてきた。

『病魔に殺され病死するより、運命と心中して老死するより、同胞に殺され他殺されるより、誇り高き自由な自殺を選ぶ』

それが彼の歪んだ思想だ。

どんな過程を経てそのような思想に行きたつたのかは分からぬが、ガゼローフが見た目よりも長く生きているのは、誰もが知っていた。

それはガゼローフが、『人対機戦争』の詳細を知つてゐるからである。

それはまるで見ていたかのような描写で、彼は、何度も死にかけながら語つた。

事ある「」と「自殺しようとするのは、そのためかもしない。

しかし、人対機戦争の事実を知っているのは、何もガゼローフだけではない。

ゼオンも、その戦争のことは知っていた。

彼の話によると、彼が生まれたのがそれより少し前の」とらしい。それにスゴウも、師匠的存在だった祖父から話には聞いていた。

今から、八十年か、それよりも前の話だ。

「おーおい！ 飯だぞー！」

テーブルに料理を並べ終えて、スゴウは部屋にある、上に押し上げるタイプの窓から、ツェナとティオに言つ。

「はーい」

いつも通りにそんな声がして、スゴウは微笑んで窓を閉め直す。

「さあ～て、先に座つてよしづせ、ガゼローフ」

笑顔で振り返ったはずのスゴウの表情が固まった。

わなわなと震える手に、未だ包丁を持ったまま、ガゼローフは聞き捨てならない分の羅列を淡々と口にし続けている。

「な、なんで……？ なぜそんなに僕を信用するんだ。味に自信なんて無いのに…美味しい事を前提にしてるんだ！ そ、そそ、そんな、自信ないよ…………ああつー！」

「ガゼローフー！」

「不安だ！ 胸が張り裂けそうなほど不安なんだ！ この不安に耐えきれないでの、死なせていただ……！」

「止めるつってんだろうがあああつーーー！」

スパンッ！

と呑き落とされた包丁。

そのタイミングで、ショナとティオが、リビングに入ってきた。

二人とも、スゴウとガゼローフのやりとりに小さく苦笑をもらしただけで、すぐに席に着く。

それほど、この光景は日常的なものだと叫ぶ事なんだらう。

しかし、毎度毎度付き合わされるスゴウとしては、こんな自己主張はやめてほしかった。

「うん、今日もお料理美味しいよ、ガゼローフ」

「コリと微笑んだツェナの反応に明らかに安堵して包丁を仕舞にキツチンの裏に向かったガゼローフに、スゴウはもう笑うしかない。

「本当、何なんだよ、あいつは」

疲れてため息を付いたスゴウに、ツェナもティオも笑つて答える。しかし、残念ながら一人ともスゴウの質問には答えることが出来なかつた。

そう。

ガゼローフはそんな奴なのだ。

第八話・塗まる歯車 リーダーと街長

朝刊を手にした、金髪碧眼の青年ゼオンは、大きくため息をついた。

原因是切り裂き屋の記事だ。

また被害者が出たらしい。

「…………何だつてこんな事を」

悲しそうに瞳を伏せたゼオンは、新聞を置むと、出掛けの準備を始めた。

今日はインギア集会が開かれることになっていたはずだから。

朝の、それほど早くない時間帯に、氷のような瞳で、若街長のルークは身仕度もそこそこに屋敷を飛び出した。

事は急を要する。

護身用に剣を携え、ルークは辺りを見回しながら、街の通りへと辿り着いた。

朝の割りには人が多い。

十三・四の少年を探して、ルークは通りを駆ける。

「アーク……！」

今朝、屋敷から姿を消した最愛の弟の名を、ルークは祈るよつ口にした。

† †

「ひいいい～んっ！～！」

「ま、待つてよ、ティオ！」

路地を子供一人が駆け抜けた。

先を行くのは、少女と見紛うほどに可憐な、赤毛の少年ティオ。

後を追うのは、名の通りに白い肌で黒髪の少年ユキ。

「うう～…………なんでよつこにもよつて、あんなとこに行っちゃった
かなあ」

ティオの後を追いながら、ユキは朝刊を見なかつたことを、激しく
後悔していた。

本来なら、今、この街にある抜け道や、秘密の通路を教えて貰えて
いるはずなのだが、本日最初の抜け道を抜けた瞬間、思いもよらぬ
場所に抜けてしまったのだ。

そこは『切り裂き屋』の犯行現場。

血の染み込んだその場所を直で見てしまったティオは、奇妙な悲鳴
とともに、ただ今疾走中だ。

しかし、ビビをびっ走ったのや～。

ティオを見失つたら、自力で帰れるか怪しい。

「ティオ待つて……つて、あ！」

その瞬間、ティオの姿が、煉瓦の壁と建築物に区切られた曲がり角へと消える。

見失う訳にはいかないと、ユキは走るスピードを上げ、壁に手をついて遠心力も加え、曲がり角を曲がった。

しかし、その瞬間、悲劇は起つた。

「…………あう」

「きやんっ！…」

「フギュルっ…………ぐえつ！？」

それはユキが角を曲がつた瞬間だった。

よりスマーズに曲がるために、手を壁にひっかけ遠心力を利用したユキに、ティオの背が、正面から衝突した。

ユキに倒れかかったティオも、相当の勢いで誰かとぶつかつたらしく、彼らの正面には、涼しさを思わせる薄い青の長髪少年が倒れて

いる。

仰向けに寝転がっているとも取れる彼は、整った顔立ちをしていて、しかし無表情だった。

「うう……えっと、大丈夫？」

下敷きになつたユキと、ムクリと起き上がつた少年に対し、テイオが声をかける。

頭を押さえて唸つてゐるユキなどお構いなしに、少年はゆっくりと立ち上がる。

ぽんやりと空を見上げた少年に対し、テイオとユキはその少年を見上げた。

難なく立ち上がつたところを見るかぎり、それほど大きな怪我をしたようには見えないが、応答がない。

「あのう……？」

と、テイオが再度、声をかけようとした瞬間だった。

「いたーつ！ いたいた！ じゅぢよー！」

若い女の声が裏路地に響く。

そして彼女は《人形狩り》だろ？

《イン・ギア》ならば、あんな風に叫ぶことはしない。

「ヤバッ」

「逃げるよおつー！」

「う？」

ぼんやりと立つたままの少年の両脇を掴んで、ティオとユキは声とは反対の方向へと走った。

後ろから、数人の足音が聞こえてきた。

「え、え？ ティオ、どどど、どこ行くのーー？」

道など知らないユキは迫る行き止まりの煉瓦壁に突っ走る。

ティオがスピードを緩めないので仕方がない。

もう、衝突する事を覚悟してユキが目を瞑る。

と。

「か、絡繹り扉ツー？」

とある一角の壁が、くるり、と表裏を入れ替え、壁の向こうにある敷地を抜ける。

しかも扉を抜けた先は、緑に隠されたトンネルのようになつてあり、まわりの植物と相まって、もし壁の上から見られても、分からぬよづになつてゐる。

しかし、そこは明らかに他人の家の敷地だつた。

「て、ティオ……通つていいの？」

「うん！ ボクの師匠のお庭だからね」

「し、師匠！？」

そつと言つてゐる間にも、緑のトンネルは終わりを告げる。

そうして表れるのは、白い、高床式の別荘のよつたな家屋。

「こりつしゃい、ティオ。一人はお友達？」

その場所で花に水をやっていた人形姫が、小首を傾げる。

白い髪、白い肌、白い瞳。

テラスのわざわざ口陰に入つて、そこからでない彼女は、黒い薔薇をあしらつた、一見ドレスのような衣服を纏つており、まるで彼女自身が飾りモノのように見せていた。

「お友達だよ！ ちょっと隠れさせてー！」

「いいよ。もう少ししたら、スマカゼオンも来ると思つかう。ゆっくうしてこつて」

微笑んだ彼女に軽く会釈をして、そうして、ユキは、ティオに引きずられるようにして、家の中に足を踏み入れた。

第九話・填まる歯車 顔合せ

「あつ」

「……つと、すまない。よそ見をしていた。怪我はないか?」

「いえ、じつらじやほんやりしていく…すみません」

人も増えてきた街角で、一人の青年が肩をぶつけた。

金髪碧眼で、《イン・ギア》のリーダー・ゼオンは、かなり急いでいたであろう、流れのような、それでいて濃い青の髪の青年を見て、瞳を見開く。

そして、相手側も、鋭い瞳を丸くして、ゼオンを見た。

「おまえ、《イン・ギア》の…」

「街長さん……」

それほど見知った仲である訳ではないのだが、互いにそれなりの浅からぬ繋がりはある。

初対面であつても、すぐにそれと分かる程度には、互いを知つていた。

「あの……お急ぎのようでしたが？」

額に薄く汗を滲ませた、若街長・ルークの表情に切迫したものを感じ、ゼオンは尋ねる。

とたんにルークはゼオンの肩を強く掴んで言った。

「十三歳くらいの男の子を見なかつたか？　薄い水色の髪で、外に跳ねるくせがあるんだ。目はそれよりも、もう少しだけ濃い色をしている。ほんやりしているのが特徴で、今日は確か、青系の服を着ているはずなんだが……」

「……お、落ち着いてください、街長さん。分かりました、探してみますよ」

「あ……すまない」

ゼオンの肩を掴む力を、知らずに強めていたルークは、けおされたように目を丸くしているゼオンを解放する。

「大切な弟さんなんですね」

「……ああ」

当たり前だ、と咳いて、ルークはまた人込みのに消えてゆく。

小さく微笑みながら、ゼオンは知り合いの家へと歩を進めた。

白い人形姫の住まつ所ここに、まさか、件の少年がいるとも知りやす。

‡

「おおう……随分可哀想なガキンちよ連れてきたじゃねえか」

「可哀想とか言わないでよ！ 失礼だなあ

ギキとティオに挟まれる形で、無表情にぼんやり座っている少年に

対し、スゴウが言った一言は、本当に失礼極まりないものだった。

「本当、失礼だと思つ……でも、その発言の裏に隠された意味を知つてゐるだけに、あまりにも悲しい。悲しきがるから、今、ここで死……」

「待てや、アラああああつ！」

ふらつと現われたガゼローフの行動に絶叫しながら、スゴウは彼にラリアットを食らわす。

飲み込もうとしていた、トリカブトのカプセルが床に散らばり虚しく転がる。

唚然とした様子のユキとは対照的に、少年は無表情だ。ピクリともしない。

「それよりガゼローフさん。隠された意味つて何？」

すでに軽く流せるまでに慣れたティオが、ガゼローフに尋ねる。

彼はケフケフ言いながら、鬱々とした表情のまま答えた。

「彼の頭はおかしい」

「……えええつ！？ ちょっと、ガゼローフー、馬鹿じゃない！？ 本人の前でなんて事を！！」

「どうやら悪いことをしたようだから今すぐ死の……」

「捨い食いすんなああつ！！」

余りに直接的すぎる発言に、思わず捨てた薬を再度、床にばらまいてしまつたティオは、バシリ、と彼の頭を叩いた。

叩かれたガゼローフは、控えめに傷ついた様子で、ティオがばらまいてしまつた、もとは自分の持ち物であつた薬を拾い、口に入れようとした。

しかし、それはスゴウに阻まれる。

「君は、どうして止めに入つてくるの？ いつもいつも

「当たり前だらうが！」

「当たり前なんだ。それはいつから？」

「生まれたときからだ、馬鹿かお前は！」

「僕の生まれた所では、人を殺して生きていたけれど……」

「はー？」「

「……」

スゴウに掴まれた手を、振り払うようにして振つて、ガゼローフは相変わらずの表情だ。

と、そこにツエナが人数分のカップと、二つのソーサーを持つてきた。話が聞こえていたらしい彼女は、小さく微笑んだまま、テーブルの上にお盆をのせ、ガゼローフの事を話し始める。

「スゴウ、ガゼローフの言つてる事は、仕様のない事なんだよ」

「仕様のない？」

カップに紅茶を注ぎながら、ツエナはユキの言葉に頷く。

「そう。仕様のない事。ガゼローフは、そういう所に、そういう時代を生きてたんだから。話に聞くしかない僕やスゴウ、ティオやユキ、その男の子とは違つんだよ。笑つちゃうだらうけど、ガゼローフ、実は……」

「あ、遅くなりました。皆さん、すみません」

ツエナが何かガゼローフに関して重要なことを言おうとした瞬間だつた。

息を切らせた様子はないが、急いできたのが分かる物言いで、ゼオンが扉を開ける。その顔を見て、ツェナは言った。

「ガゼローフはね、ゼオンよりも年上なんだよ。十歳くらい」

「……はい？」

話の流れを掴めなかつたゼオンだけが、キヨトン、とした表情で首をかしげた。

ユキは、ゼオンとガゼローフを交互に見る。

ガゼローフがゼオンより年上だといつのは理解できる。しかし、十歳も年上だとは思えなかつた。

「ゼオン、つて何歳？」

恐る恐る、といった感じで尋ねたのはティイオだ。

「歳、ですか？……ええと」

考えるように顎に手を当てたゼオンの代わりに答えたのはスゴウだつた。

「コイツは一応、機融人だからなあ……人より面積も多いし……見た目の三・四倍つてトコだろ？」「

「さん、よんばい？」

「そうだ。何回も言わせんなよ。……だから、七十か、八十の間だろ」

「えええええっ！？」

驚愕しているティオとユキに相変わらずの笑顔を向け、ツェナは彼らに更なる衝撃を与えた。

「だから、ガゼローフは、八十歳から九十歳くらいの間ってことだよ」

「マジでか！？」

その事実にはスゴウですら驚いた。

この、二十代前半にしか見えない男が、まさか九十年も生きているとは思えない。

「え。え？　じゃあ、ガゼローフは機融人なの？」

少しばかり動搖しているティオに、ガゼローフは首を左右に振る。

「違う。僕の体に機械である場所はないよ。けれども、一つ、生成機械が心臓近くに取り付けてあるんだ」

もとより暗い表情をさらにもぐらして、ガゼローフは呟いた。

「そのせいで、普通にしても死ねないんだけどね。……いつそのこと、今ここで、心臓を突いて死のうか」

「やめろよ。で？ その機械つてのはどんな奴だよ」

傍らに転がっていたペンを手に取ったガゼローフを、やんわりと止めて、スゴウは話をすすめる。

名残惜しそうにペンを置いたガゼローフは、機械の説明をしだす。

「僕の持つている生成機械は、十分な水分に、新しい細胞の種のようなものを包んで、血液中を流す、と言つものなんだ。そして、老化し、衰え、死んだ細胞の代わりに、それが立ち代わる。細胞の限界分裂数が無くなつたから、ボク自身は衰えたりしない。水分が細胞に十分に含まれていれば、細胞自体が長生きするからね。始めの時点から、細胞自体が長く生きれるようになつてゐる」

「へえ……す、こじやないですか！」

素直に感心して瞳を輝かせた雪に、ガゼローフはまたもや首を左右に振った。

「す、くなんかない。所詮失敗作だよ。持ち主の意志にそぐわない機械だなんて」

「……」

一瞬だけ場が静まった。しかし、それは白い声で、すぐに搔き消える。

「ガゼローフ。そういう事は、世界中の皆が、君の事を忘れてしまつてからいいなよ。僕はね、君に会えて毎日、楽しい思いをさせてもらつてるよ。君は、僕と違つて、太陽に愛されてる人なんだから」

柔らかい光のよつた言葉に、ガゼローフが驚いたよつた隙だらけの表情になつてツェナを見る。

もしかしたら感激してるのかもしねないが、よく分からない。

「あの……今日の打ち合せは……？」

この場所にきてから、よく分からぬ展開に巻き込まれていたゼオング、苦笑しながら部屋を見回し、ある一点で、瞳を見開いた。

「ちょいこん、と姿勢良く椅子に腰掛けている、水色の髪の少年。

「スゴウ、あの子は……？」

「あ？ ああ、ティオとユキが路地裏で拾ってきたんだよ」

「あの子は……スゴウ、一緒に来てください……」

「はあ？」

いきなり慌てて、ヒョウイチとぼんやりした様子の少年を抱え上げたゼオングに驚きつつも、スゴウはそのまま後ろにひいて走りだす。

「ああーーー、ちょいと待つてよーーー！」

ほぼ条件反射でスゴウを追いついてしまったティオに、ユキはついていくことが出来ず、ぽつんと、シロナ邸に残されてしまった。

「花屋まで、送つていくから」

「うん」

初めてガゼローフの優しさに触れながら、ユキは小さく頷いた。

「貴方が、家の息子を助けてくれたティオちゃんね?」

「ひや……あ、はいっ」

「お前、緊張しちゃ」

「貴方はもう少し、緊張してくださいよ」

街長邸の豪華な居間で、《インギア》の三人は、街長の母親である、セリスと、和やかとは言えないが、話をしていた。

緊張のあまり、声が裏返つてしまつて、テイオは、目線がさ迷つていて、瞬きの回数が異常だ。

なぜ、そこまで緊張しているのやら……。

「一二一二」と笑顔のセリスを前にして、テイオは氣押されてしまつて、いるのかもしねりない。

感覚としては、花屋の彼女に似ている。

着物であるかドレスであるか。

容姿などが、瓜二つと似て、似て、いる訳ではないのだが、目が少し似て、いるような感じもある。

「すまない、待たせてしまつたな」

「わ～お」

「一」

今まで街に居たのだろうか。息を切らした様子で、ルークは部屋に現れた。

ゼオンが今日の集会に遅れてやつてきたことを思い出してか、スゴウが半眼になつて苦笑する。

それとは反対に、テイオは更に体を強ばらせた。しかし、瞳は輝いている。

「お前、本当に探してくれたのか……」

「いいえ。本当に見つけたのは、この子ですよ。街で会つたそいつです」

「やうか……」

母親の隣の椅子に腰掛けながら、ルークはテイオに視線を向ける。

「弟を保護してくれて有難う。心より感謝する」

深く頭を下げるルークに、テイオは、口をパクパクさせながら、首と手をブンブンと振つている。

その必死の形相に、スゴウは鼻で笑つて足をくむ。

ゼオンだけが、キヨトンとした表情で一人を見ていた。

「うふふ……ティオちゃんはうちの息子が好みなのかしら?」

「ブウウウ ッ！」

「テ、テイオ？」

「あは、ははははっ！…！」

「…………？」

部屋の中が阿鼻叫喚。

テイオの反応が尋常じやない。その前に、セリスが余りにも直球でテイオに投げすぎたのだろう。

テーブルに突っ伏してしまって、頭から煙が上がってる。

「て、テイオ？ あ、僕……」

「お～。後は俺に任せろ」

「…………任せました、よ？」

「信用ねー」

フラフラと歩くテイオに肩を貸しながら、ゼオンが使用人に案内されながら出て行く。

それを見送り、扉が閉まり、足音が遠くなつてから、スゴウは話を切り出した。

「わいわい、お母のむちゅちゃんの事、聞きたいんだけど」

「ヤツと笑つたスゴウに、ルークは一度目を瞑つて、話し始めた。

「まあ、なんとかなんだろ。アフターケアがなつてなかつたんだよ
な」

「感謝する」

真夜中も真夜中な時間に、スゴウとルークは、フラフラと街を歩いていた。

ルークの状態について、細かく説明していたら、こんな時間になってしまった。

名田はルークがスゴウを送る事になつてゐるのだが、この場合はルークが勝手に付いてきた、と言つ事になるのだろう。

「弟の事については感謝している。しかし……」

「説教すんなら帰れよ。これは俺の問題なんだつつの」

「だからと云つて、一人でジャックとやりあつなど……」

「なめんなよ。俺の眼」

「……そこまで云つのなら、引き止めはしないが」

先日受けた傷の痕に触れながら、スゴウは顔をしかめ、僅かに下る道の向こう、その上にかかる橋を見る。

道上にかかる橋。その柵に腰掛けている人影。

「居たな、今日も」

「橋の上か?」

「見えんのか?」

「田はいいんだ」

それを言つなり、スゴウよりも早く駆け出したルーク。

腰の剣に手をかけ引き抜こうとした瞬間だった。

「君は、女の子?」

「!?」

「髪長いけど、男の子か……つまーんなあい!」

「先走んな、ルーク!」

信じられないスピードでルークに近付き、抜刀を阻止したそれは、スゴウの登場により剣から手を離す。

「ジャック」

「やあ、この間の人。あの時はごめんね? 君が女の子を庇つから

……

「庇うに決まつてんだろ。今日はあん時のお礼参りだ！」

ぐつと踏み込み、ジャックに手を伸ばしたスゴウだったが、それを逆手に取られ、懷に入られてしまつ。

助ける間もなく、まさに弾丸のような突きを見回れたスゴウは壁に強かに背を打ち付ける。衝撃を吸収する事も出来なかつた彼は、気力で立ち上がつたが、それ以上何も出来ない。

「……君は、庇つする？』

赤い布に隠された顔は、口元しか見えない。その笑いに、ルークは今度こそ剣を引き抜き、ジャックに向けた。

「お相手、いたす」

悪魔と聖騎士の対峙のよつたな一場面。

夜明け前。誰もが眠つてゐる時間、静かにそれは開始された。

どちらが勝のか、誰にも分からぬ。

第十話・填る歯車 私と貴方

当たらない。当たらない。

繰り出しても繰り出しても、双方の攻撃は当たらないし当たられない。

力量の差はない。ないからこそ、当たらない。

「……ん~」

後ろに大きく退いたジャックが、顎に手を当て首を捻る。

「黒いお兄さんは、ただの人柄だつて分かつたけど…青いお兄さんはどうして僕にちょっとかい出すかな?」

起用に片足でバランスをとりながら、金髪と田嶺しの赤い布の合間から僅かに除く、青の瞳が、不思議そうに問掛ける。

それにルークは隠すことなく言つてのけた。

「「」の街の人間を殺されでは困るんだ。私は、「」の街長だからな

腰に剣をくつつけるように構え、ルークはジャックを睨む。

ジャックは、囁つたように間合いに入つてこない。

「へえ……青のお兄さんは街長さんなんだ」

「そう言つた」

「だつたらあ」

顎に当てていた手を、笑つ口を隠すのに使つて、ジャックは小さくうつ向く。

「ここの街の女をさ、全員、閉め出してくれればいいよ。そうしたら僕は誰も殺さないから……一人ぐらいは多目に見てよ?」

くすくす笑うジャック。

ルークは一瞬思考し、結論をだした。

「無理だ」

「何でえ?」

「大昔の戦争の影響で、住める場所など、ここ以外にはない。……

あるとしたら、別大陸になる」

「んふふ……知つてゐる」

「一」

真面目に答えたルークを嘲笑うように、ジャックは体をくの字にする。

声を出さない笑い。

そして上げた顔に張り付いた表情は、やはり笑い。

「だから僕はここにいるのさあ。ここは逃げ場のない籠だからね…
うふふ」

「お前……っ」

「ここには全部揃つてる。僕がなしえたい望みは全部ね！」

そして、指折り数えるようにひらひらと望みを並べる。

「女を一人残らず殺して、次に男。順々に、ゆっくり確実に殺していくんだよ。ジワジワいためつけた後に、魔女に捧げるんだ。そして逃げた人形を少しづつ弱らせて、そうだな僕が手を下さなくとも、勝手に死んでくれるようになるまで、ずうつと見てようかな。楽し

み

「……理解できな」

「温室育ちのお嬢ちゃんには分かんないよ～だ。……ね、君は諦めていたものが戻つてくるんでしょ」

「？」

手をぐるぐると回しながら、ジャックは刃を背にしてにせりと笑う。青い目が、まるで血が滲んでいくよう、不気味に赤い輝きを放つ。

ルークは思わず、後退する。

「とほけないで。君の弟だよ。嫌な父親もいなくなつて、弟だつて普通に暮らせるようになるんだよね？ いいよね、願いが叶つて。……そこのお兄さんもだよ。一度は両目とも使い物にならないくらいに焼けたのに、機械の目を付けてずっとじずっとよくなつた。やりたい事はやってきたし、やれないことなんてないもんね！」

やら、と踏み出した足にすら、何らかの威力がありそうで、ルークは表情を険しくした。ここまで如実な恐怖を感じたのは、初めてかもしれない。

「でも僕は違うんだよ全然違う。君らの想像つかない事を体験して、想像つかないだけの思いをして、それで、ここにいるんだ。僕を止

めるなんて無理だよ

「うふふ、と笑うジャック。

冷や汗の伝う額に、ルークは手が震えていることに気が付いた。力のこもりすぎた腕が、悲鳴を上げている。

けれども、ここで動く別けにもいかなかつた。

動いたら、殺される。そんな予感があつた。

しかし、そんな時間も永遠な訳はない。

一つの金色が、ルークとスゴウの前で向かい合つたのは、一瞬での出来事だった。

「…………やめなさい、ジャック」

静かに言つたのは、『イン・ギア』のリーダー、ゼオンだつた。

金髪で、目が青くて、優しく温かな印象を受ける、そのままの彼が、静かに言つた。

金髪で、青い目をしていた、刃物のような、ジャックに。

二人は、似ていた。とても。

「ジャック、やめなさい」

たじろいた様子のジャックに、追い討ちをかけるように言つぜオン
はひたすらに静かだ。

いつものぼやぼやしたような雰囲気はない。

日が上つたばかりの、温かな静寂のよつた彼。夜には似合わない。

「なんで出てくるかな！」

「この二人は、私の友です」

明らかにジャックはゼオンと知り合いであるようだった。しかも、
ゼオンの方が有利な立場にある。

なんの武力も持たない彼が、どうして殺人狂を従えられるのか疑問
だ。

だが、それは紛れもない事実。

「どうなつてんだよ

その弦きに答えるものはいない。

闇に吸いとられるよ」、その間にせきえる。

「貴方は間違っています。そんなやり方ではいけない」

「……」

「田標を一つに定めなさい。ジャック」

何に対するどんな会話なのか、想像もつかない。

ただ、ジャックが不服そつのだけは理解できた。眉を寄せ、子供のように唇を尖らせる。

「一つになんて絞れるもんか！ 僕はこの街に……」

「ジャック」

何かを言おうとしたジャックを遮るかたちでゼオンはペシャリと止める。

はっとしたジャックは、小ちく唇を噛むと、逃げるよつて走つてしまつた。親に怒られたかのような、泣きそうな顔をした後に。

「……」

「……」

後には、月明かりと静寂、そして痛みと動悸だけがのこる。

痛みを誤魔化しながら、ゼオンの肩を叩いた。スゴウの耳は、小さな咳きを聞いた。

「……プログラム・1、起動停止」

「…………は？」

プログラム？ 起動停止？ 戸惑いに手が止まってしまったスゴウ。

そして、ゼオンが振り返った。

「さ、帰りましょか」

「コソと笑った顔で、ゼオンは少しだけずれた眼鏡を直した。

結果、スゴウの家に行き、それからルークを屋敷まで送った後に、ゼオンは自宅へと帰る事となつた。

あの場面で、どうしてゼオンがその場所にきたのかは、今はまだ分からぬ。

第一話・填まる歯車 人形狩りの長

あの夜のことは聞けず仕舞いのまま、スゴウは街を歩き回っていた。

インドア派のゼオンと、あまり堂々と歩き回れない立場になつたルークの代わりのつもりだったのだが、スゴウは自分がどんな立ち位置なのだか、本当の意味では理解していなかつた。

「どうすかなかなあ……でもなあ」

うろうろと、ゼオンの家の周りを歩きながら、彼を訪ねる決心がつかずについた。

しかし、そんな中でも、スゴウは周辺から感じる視線を逃してはいない。

少なくはない人通りの中から、数人分の視線が自分に集まっていた。見ていいるという範囲ではなく、監視していいると言つた感じだ。

いつもの事だし。 と、溜め息をついたスゴウ。 その彼に、 フラフ ラとした足取りの男が、 倒れ込む様にぶつかってきた。

「うめこ」

どうやら向い側の店から出て来たらしい男は、日が高いにも関わ

らず、頬を仄かに赤く染めている。

考えるまでもなく、酒の飲みすぎだらう。

「……ぐ」

「おい、大丈夫か？」

うめいた男は、スッポリとフードマートを着ていて、その容姿は分からぬが、聲音は男といつには少しだけ高い。

「は……吐きそつ、う」

「お、お前、こんな道の真ん中で吐くなよー…。くそ、もうひょこ我慢しin」

「も、申し訳ない……」

取り合えず裏路地にでも連れていこうと男を抱えたスゴウは、そいつの軽さに驚いた。

ひょい、と抱げるほどだが、身長はスゴウと差ほど変わらない。

「かたじけない……うえええつ」

「ああ、ほり、そんなんいいから……全部吐け」

裏路地の端に付いている、排水用の溝に、今まで我慢していたものを吐き出している男の背を摩つてやりながら、スゴウは溜め息をつく。

「ちよつと待つて。水持つてくれるから」

ゲホゴホいっている男をその場に残して、スゴウは近くの店から水をもらつてきた。

それでうがいをした男は、先程とは全く正反対の清々しい笑顔でスゴウに頭を下げた。

「助けていただき、心より感謝する。拙者、ツガサと申すのだが、貴殿は？」

「あ？ 僕？ 僕は……スゴウ」

花屋の女主人とはまた違つた言葉の使い方に、どことなく戸惑いながら、スゴウ答える。最近、このような話し方をする人間をたびたび目撃したような気がするのだが、どこでだつたかは忘れてしまった。

「……スゴウ……わつであつたか」

「は？」

「いやいや、いやひの話だ。気にしないでトされ

「ああ、わつ」

もとより、初対面の人間と、和氣あいあいと話をするよつな達ではないスゴウは相手が言つた通りに気にしないことにした。

気にしたとしても、答えが出るよつなことはないだろつじ。

せつして去つたとしたスゴウは、最後にけりつと相手を見た。フードの丈よつ長く、その刃物。抜き身のままで下げているので、どうも現実味に欠けるのだが、確かにそれは、それでしかなかつた。

剣ではなく、刀といひ、凶器。

「今日は本当にすまなかつた。後日、お礼申し上げると共に、詫びの品でも」

「ああ、俺は別にいらねえけど……くれるんならむりとく」

「面白い方だな、貴殿は。おつと、それでは。拙者はこれにて

「もつ飲み過ぎんなよ~」

と、急いで手を振り去つてゆくスゴウと反対の方向に進みながら、ツガサは足を止める。

「ツガサ様、いかに」

「あれがスゴウという男のようだ。聞くよりも遙かに出来る男だな……ただ今は何もするでないぞ？ アレに感づかれる訳にはいかん」

「は」

影の中から出てこないそれは、ただひたすらにツガサに忠実だ。ツガサもそれに慣れているようで、余裕が表情に見てとれる。

先ほどまでの失態が嘘のような、堂々としたたち振る舞いだ。

「直に時が来る。その時にどう動くか、あの男の反応次第だな」

「では、そのように」

そして闇に消えたそれは、何の痕跡も残さずに溶けたような静けさだけを残す。それを確認したツガサは、ゆったりとした足取りで歩き始めた。

行先は、街のはずれにある古いビルの跡地。

“人形狩り”として集められた屈強な者たちが集う場所。

その“人形狩り”的長を務める男は、スゴウとも、街長とも、イン・ギアのリーダーとも、たいして外見の年齢は変わらない男だ。

「もつ直ぐ、会えるぞ」

そう呟いて、胸に手を置いたツガサは、空を見上げ、わずかに目を細める。

「それでどうするかは、お前次第だ」

そのつぶやきは、誰に聞かれるでもなく、風に流されるともなく、しばらく中にじどまつただけで消えていく。

抜き身の刀が、光を反射して輝いただけで、あたりには人も疎らに、夕暮れに近づいていく時間を知らせた。

第十一話・填る歯車 刀と糸・技師と人形

情報と言つのは、時に困つたものだとゼオンは思つた。

たぶん、情報を持つてゐるのはスゴウでなかつたらば、もつ少し樂であつただろうと思つ」とほ々々ある。今が、その状態だ。

「場所とか……分かる?」

「分かりますよ、心配いりません」

「そう

伝言でその情報を伝えてきたスゴウは、すでにその場所に行つてしまつたらしい。

だから、ゼオンは焦りの表情で、裏路地を駆けている。隣には、ガゼローフの姿が。

「スゴウを引っ張り戻しにいくだけですかね? あまり悪戯しないよ」

「うん。……僕って信用されてないのかなあ。そつか、信用されてないなら、別にここで死んでも」

「そうこう」とを軽く口に出すものではありません。……信用して

いない訳ではないですよ。ただ、念を押しただけです「

苦笑しながら言つゼオンにも、余り余裕はない。なぜなら、今回は
よりもよつて“人形狩り”の本拠地に行つてしまつたのだから。

彼の行動力と心臓の強さには呆れてしまつ。

付き合い始めた頃からそつだつたのだが、彼は“人形狩り”に敏感
すぎる。技師だからという理由にしては、いきすぎている氣もする
のだが、こればかりは本人に聞くしかない。

「街外れにある、古い城壁跡らしいですが……」

「……ああ、あそこ」

ぽんやりと呟くゼオンは溜め息をついた。

横目で見たゼオンは溜め息をついた。

「くれぐれも、悪戯はいけませんよ」

「……」

何も言わないガゼローフ。ゼオンの不安は募るばかりだった。

「スゴウ！」

一人も見張りのいない入り口。

中に入つて、親友の名を叫んだゼオンは、はつとした。

「よ、速かつたじやん」

「スゴウ」

入つて直ぐの広間にあぐらをかいているスゴウは、嫌味なくらいに笑顔だつた。何もないにこした事はなかつたのだが、それにしても静かすぎた。

「スカツた」

立ち上がり、溜め息をついたスゴカニ、ゼオンは溜め息を返す。

「……全く、私たちがどれだけ心配したと思つてるんですか?」

「悪い悪い。別に死ぬような事もないだらつて思つて」

悪びれなく言うスゴカニ。ゼオンは何かを言おうと口を開いたが、結局何も言わずに、田がしらに指を当てる。

「危険ですから、今後は控えてくださいね」

「……無理だと思つ」

ゼオンも、ガゼローフのいい通りだと思つた。

しかし、やめてもらわなくては困るのだ。彼は少し、血の気が多すぎる。逆にガゼローフは、無さすぎるのだが。

「だつてよ、筋通して話付けてやつと思つただけなんだぜ?」

「私達はあくまで平和的に事を進めなければいけないんです。武力はいけません」

どこか極道じみた言い回しでスゴウがズカズカと入り口へと歩き出す。

それを追うかたちでゼオンとガゼローフが続いたが、その足は、入り口から入る光が陰つた事で止まる。

「お初にお目にかかる、ゼオン殿」

集団の先頭に立ち、黒いフードマントを来た男が言った。

聞き覚えのある声に、スゴウは一步下がつて身構える。この声との姿。

昼間に会つた男だ。名前は確か…ツガサ。

「ツガサ……だつたな。お前、まさか

「スゴウ殿。まさか初めに来るのが貴殿とは思わなんだ」

「……“人形狩り”か

フードを取り、笑う彼は、二十歳前後だろうか。独特的の鋭い目付きに、結わえられた黒髪。そして腰の刀。

本当にこの大陸からは姿を消したと思っていた一族の特徴そのものが、そこにいた。

人形の始祖。自動で動き話すカラクリ人形を、人類で始めに作り出した、東の民。

故に彼等は、一人で人形を造れると言われている。

人形師と技師のいる他の人間と違つて。

「いかにも。某“人形狩り”にて族長をしてある、ツガサと申す。以後、お見しりおきを」

「私は“反人形狩り イン・ギア”リーダー、ゼオン。……覚えておけと言ひながら、なぜ剣に手を伸ばすのです？」

一瞬、火花が見えた。

こうして強気に言つているゼオンだが、彼には戦闘能力が全くない。逃げ足や、知識は豊富であるのだが、いざ戦闘となると、それを活用できないのだ。

「おい、ゼオン」

警戒して前に進みでようとするスゴウを手で制し、ゼオンはツガサを見据える。余裕の笑みを浮かべるツガサは、抜き身の刀に手をかけたまま、瞳を細める。

「……中々、おつなことを

「？」

彼の言葉をかわきりに、後ろの集団から声が上がり始める。やわめきが、罵声に変わり始めるのに時間はかかるない。

何が起きているのか分からぬゼオンとスゴウは、困惑の表情でツガサと“人形狩り”的面々を見る。

と、きい、と扉が開く音がして、いつの間にやら姿を消していたガゼローフが、影になつていてる部分から天窓の明かりの中に出てくる。いつものやる気のない表情ではなかつた。

人を寄せ付けないような、そんな鋭い表情は、スゴウもゼオンも通り越し、ツガサに向いている。更に言つなれば、彼の持つ刀に。

「……帰ろう、ゼオン、スゴウ」

ぽつんと言われた言葉を、その意味の通りに受けとるのに、なぜか時間がかかった。

「あつちに裏口があるから、そつち通り

「おつねー」

「え……ええ」

有無を言わせないといつよじ、スゴウの腕を掴んだガゼローフが、振り返つた瞬間だった。

「待て、貴様」

瞬間に聞こえたのは、ブチブチと糸を引き千切る音。同時にガゼローフの指先から血が滴る。

無理矢理引き千切られた糸が、ガゼローフの指に食い込んだのだろう。

「！」の……キチガイが！

「……」

しゃりん、と音をならした刀は、ガゼローフの鼻先を通りすぎた。

突き飛ばされたスゴウは、ものの見事に転び、ゼオンに気遣われる。ガゼローフは気にした様子はない。

「やつと見つけたぞ、裏切り者が！　八十余年、一族と巫女様の恨

み、晴らさせていただく！」

「……ああ、そう」

それを聞いた瞬間、ゼオンの頭に余切つた感覚は、彼を動かすのに十分だった。

ガゼローフは、避けない。避けなかつた。

だから変わりに斬られたのはゼオン。しかし、それによつて血が流れるこはない。

「人形……！」

「違えよ、機融人だ！　おい、ずらかるぞ！」

「はい！」

服も皮膚纖維すら切り裂かれたゼオンの肩は、銀色の骨組みが覗いていた。

それは鉄ではない。銀だ。

「あれは……巫女殿の」

ゼオンが姿を消した瞬間、動けなかつた “人形狩り” 達の呪縛がとられる。いきり立つた彼等が、裏口への扉へ殺到するのを見て、ツガサが声を張り上げた。

「やめい、屑どもが！」

「……ツガサ様」

「なんだ、力ゲ」

「あの輩、追い掛けますか」

「ああ。我が一族と巫女様にかけてな」

「は」

自らの支配下にある人間を押し込みつつ、部下に指示を出す。

それから彼は、一族と巫女様の事を思い出す。

カラクリ人形の技術を急激に発展させた異国の巫女様。金の髪で、碧い瞳の……。そう、あのゼオンと同じ。美しい女性だった。

『私の弟よ

そうして紹介された、彼女と似た少年。

戦争に出た彼は、人形側ではなく人間の側として帰ってきた。姉である巫女様を説得しに。

それなのに。

あの男は巫女様を殺した。あの、ガゼローフという男は。

「許しはせぬ」

一族を死にいたらしめ、巫女様を無為に殺したあいつを。

巫女様と弟の和解を無いものとしたあいつを。

恨んでも恨みきれない。人形師の端くれであるくせに。

この刀に誓つて、いつか、殺す。

第十二話・填る歯車 過去の欠片

「……ガゼローフ、先程の話ですが」

「……」

無言のままツエナ邸に帰りついたガゼローフとゼオンとスゴウ。

ツガサという東の民から受けた傷。

スゴウが見た結果、肩や腕の機能的には全く問題は無いと言つた
とで、皮膚部分の纖維を縫い合わせればいいだけとなつた。

よつて、この部屋にはゼオンとガゼローフしか居ない。

スゴウは向いつの部屋でツエナと話でもしながらゼオンを待つて
いるはずだ。

「貴方が……あの人を殺したというのは、本当なのですか」

「……うん」

すいすいと手を動かしてゼオンの肩を縫い合わせながら、ガゼローフは頷く。

「オリティーンだけじゃない。もつと沢山殺したよ。人形を造る人も、機会を造る人も、ゼイオンを殺したのだって僕さ」

「……」

「怒らないんだ」

「ええ。私はその様にプログラムされていませんから」

そのゼオンの答えに、ガゼローフの手が止まる。

「プログラム。そう。人形は人形。どれだけ人間らしくとも、所詮はプログラムなのだ。プログラムがどれだけ緻密に、どれだけの分歧を持たせているかによって、人形の柔軟性は変わる。」

「私は、私の父が自分の姉に似るようにと創られた人形。私の父は矛盾していましたね。それは貴方がよく知っている」

「……人形が好きで、技師でもあるくせに、人間側についた変な奴」

「一旦針を置いたガゼローフは、縫い目に特殊なノリを塗りこんで縫い目を消す。」

「貴方だって似たようなものじゃないですか？ 人形師のくせに入間側につくんですか？」

「死にたくなかつたから」

あの頃は。と、ガゼローフは呟く。今は真逆だ。死にたくて死にたくて仕方がない。

「人間は、無いものを求める。ゼイオンは人間と人形との完全な共生を。オリティーンは人形達の楽園を。交わりそうで交わらない世界」

「父は、あの人に話に行つたじゃないですか」

「うん。けどね、オリティーンは……オリティーンは人間の殲滅を宣言した」

「……」

それは一人が知つてゐる、歴史に埋もれた事実。

「オリティーンが都市ごと人間を爆破するなんて言つから……僕はオリティーンを殺した」

大地を尽く破滅へ導くとされてゐた、大地の武器、人形側の最終兵器であつた地熱爆弾。それが使われなかつたのは、唯一爆弾の起動法と爆弾の有りかを知つてゐた人物が死んだからだ。

そしてその代わり、人間側の兵器が大地を貫き、人形を焼き払った。空の武器、宇宙兵器だ。

「そのせいでゼイオンは希望を捨てたんだ」

「……私の父は、人間と人形が共に生きていく事は無いと悟ったのでしょう。唯一の肉親を奪つた貴方に刃を向けて」

「返り討ちにあつた……君の目の前で」

「覚えていますよ。まだ」

田をつむり、思い出すようにするゼオンだが、結局それは人間の真似事に過ぎない。

ゼオンの父、ゼイオンが姉のオリティーーンの思考に似せて作った人形。

ゼオンは日々自分が出来上がつて幾度に思つていた。徐々に崩れ行く父を。自分を創りながら、涙していだ父を。そして何度も自分を壊そと手を振り上げた父を。

最期に自分を見た父は、笑つていた。自分の手を握つたゼオンを『姉さん』と呼んだ。それにゼオンは、優しく微笑んで見せたのだ。

プログラム通りに。

「父を斬つて逃げ出した貴方が、まさかまだ生きているとは思つていませんでした。しかも人形師だつただなんて」

「……人形は、死ねなくなつてから創り始めた」

縫い目を消すノリを塗り終わつたガゼローフは、上から染料を振りかけ、刷毛で馴染ませて行く。

少し白っぽかつた場所が、人間の血の通つた皮膚のような赤みのある色へと変わる。

「死にたくないと考へることもなくなつてから思つたよ。死にたいのに死ねないのは……死にたくないと願うよりも辛いって」

ぼんやりと囁くには重すぎる言葉。

人形と人間。その一つを動かしたのは一人の姉弟と一人の男。

死にたくない男は、自分を含む人間を滅ぼそうとした魔女を手にかけ、魔女の手先を殲滅。

これで平和になつたかと思えば、魔女の弟で親友だつた男が自分に刃を向けてきて、彼を殺してしまつた。死にたくないから。

死にたくないくて死にたくないくて、生きていられる方法を探し、ついに手に入れた男はフと思う。

既に死にたくないという不安からは解放された。だが解放されたところで、自分は何の為にここにいるのだろうと。

沢山の人間を手にかけた。親友も居ない。

時が流れるに連れ、見知った人間はどんどんとしんで行く。

死にたくない男は、死ねない恐怖を知つた。死ねない苦しみを知つた。

「親を失つて、何も分からずに追われる人形と同じ」

「自分では、死ねない」

人形に、自殺のプログラムは存在しない。自然に壊れるのを待つしかない。

「貴方は、この先どうします」

「……」

完全に元に戻った肩を見て、ゼオンは言つ。ガゼローフは道具を片付けながら答えない。

「私は、貴方を止めません。貴方がしたいようにして下さい。誰も

見ていない所でなら……貴方が自殺まがいに殺されていても、私は誰にも何も言わないでしょう」

「それもプログラムなの」

「ええ」

「僕への復讐のつもりかと思つた」

パタン、と箱をしめて振り返ったガゼローフは、一瞬目を見張る。ゼオンがオリティーンに見えた。

人形側には女神と呼ばれ、人間側には魔女と呼ばれ、東の民には巫女と呼ばれた女。オリティーン。ゼオンのオリジナル。

微笑む様が瓜二つ。

そしてゼオンは言った。

「復讐のなら、再会した日から、ずっとしていますよ。拷問の様にね」

見るたびに思い出す、今思えば、罪にしか思えない所業。

「そうだね」

肩をすくめたガゼローフは、考へることを止めた。プログラム。ゼオンの行動は、プログラムなのだ。そしてプログラムを設定したのは、親友だったゼイオン。

彼は自分に切りかかる間際、負ける事を前提として、ゼオンに復讐のプログラムを埋め込んだのだ。

「……」

パタン、と閉まつた扉。スゴウの声と、ショナの笑い声。部屋の戸を開け、何時もと変わらない様子で会話に混ざるゼオン。

一人部屋に残つたガゼローフは、そこにあつた針で思いきり自分の手の甲を机に張り付ける。針は机に刺したまま、手を針から抜くと、わずかに血が着いているだけで、傷口はない。

思わず吹き出した彼は、手を握り締めて呟いた。

「化け物じゃないか……僕は」

人形よりも、たちが悪い。

第十四話・填の歯車 ジャックと少年

嫌な夢を見た。

ママが自分に覆い被さっている。

瞬きせざり、銀に煌めく剣を見る。前方にしか刃のない剣。背の高い男。

ママを殺した男。

世界で一番殺したい男。

「……」

「……わ

金髪隻眼の殺人鬼、ジャックを前にして、その少年は舌足らずに、転んだままの格好でそう言った。

ぼんやりと覚醒しきらない頭で少年を見下すジャックは、青の瞳を細める。

長い髪。

「君、女の子?」

「おんなの?」……? 「おとこの?」

「はあ?」

少年の言葉に要領を得ず、ジャックは未だに起き上がりない少年の頭上に立ち、しゃがみこんで、その顔を覗きこむ。

薄い白に見えなくもない、水色の髪。外着には見えない薄い衣。人形のような、感情のない表情。

「……」

「……」

見下すジャックを、じつと見返す少年。そこに会話はない。

「金色」

「は

こきなり言葉を発した少年は、グイッとジャックの金髪をつかんで引っ張る。

「金色……せおん。金色」

「お前……何」

見知らぬ少年の口から出てきた、見知った男の名前。一気に不機嫌になつたジャックは、少年の手を振り払おうとしたが、彼の手に当たる前に、少年は髪から手を離していった。

絶妙なタイミングで。

少々カッとなつたジャックが、少年の胸ぐらを掴むが、彼はぶさらがつたまま微動だにしない。

「……」

本当に、反応しない。

誰の侵入も許さない路地裏。ジャックの犯行の形跡が残るそこでの少年は何も感じていないようだ。

「あ、おひるだ」

また、突拍子のない事を言つた彼に、ジャックは苛立ちを募らせるばかり。

だが、次の瞬間、苛立ちが驚きになる。

「おひるだ、おひるだ……おひるか、かえる」

そう。気が付いたら、少年はよちよちと、大通への道を歩き出していた。

軽々とジャックの腕を通り抜けて。

「……」

「ここであはい、おひるわちやひ……」

なんて言しながら、おぼつかない足取りで彼は、歩く。

後ろのジャックに、何の警戒心も抱かず。警戒する価値すらないよ。

「きょうは、みんなで、おしゃかい……」

ティオとユキが来る。

少年、アーヴはそのまま家まで歩いて帰った。
自分が、どんな目にあったかも分からず。

それは、人が望みすぎたがゆえに始まつた戦争。

『なあ、お願いだから』

父さんが言つていた。

『お前にしか頼めないんだ、お前なら出来るだろ』

だつてもう、人殺しなんだから。

と、仲間に向かつて平氣で言えるよつになつてしまつた父さん。

『一人も一人も変わらないだろ、だから』

殺せと言つ。

私が愛した父さんではなくなつた、でも私の父さん。

『頼むよ、ガゼローフ』

すがりつかれ、ただただ困惑と不安と恐怖の表情で追い詰められた彼は、それでも首を縦には振らない。

『そつか、駄目か……』

私が立つて、その光景を見ていると知りながらも、父さんは笑つた。

笑つて、手元にあつた中ほどの剣を振り上げる。

『ゼイオンツ！…』

ガゼローフは叫んだが、父さんは止まらない。薄ら笑いを浮かべて、何度も剣を降り下ろす。

机の上、棚、壁に掛けてあつたもの。それら全てを破壊して、ガゼローフは逃れて父さんは追う。

だが、ここは狭い。逃げ切れるはずもなく、ガゼローフはついに扉を背にして追い詰められた。

ガチャガチャとなるばかりの扉に、剣が刺さる。

『……悲しいんだ、虚しいんだよ、ガゼローフ』

うつ向き、笑う父さんを、彼はどう思つたろうか。

『俺を、殺してくれ、ガゼローフ』

そう言いながら、剣を振りかざす父さんの矛盾に、私はそうなるまで不可解で仕方なかつた。

ガゼローフが、剣を引き抜き、父さんを切り捨てる瞬間まで。

『……ゼ、ゼイオン……？』

条件反射だったのだろうか。

暫く硬直していた彼は、恐る恐る倒れ伏した父さんを見下ろし、後退り、逃げ出した。

その光景を見ながら、私は……

「おや、今、おかえりですか？　アークくん」

「……金色」

「はい？」

遠慮なく引っ張られた長髪。

。アークはその手触りを確かめるように指先で擦りながら、しきりに『金髪』を連呼する。いきなり髪を引っ張られたゼオンは、嫌な表情一つせずに、黙つて微笑んでいる。

ついこの間まで、言葉を話すことすらできなかつたアークの回復具合が嬉しいのだ。

「ま、話しかけてやるとか、人が話してゐる所にいれば、普通に回復していくと思うけどな。もとから頭の出来はいいっぽいから、悪くても一ヶ月程度じゃねえの？ そちら辺はティオにでも任せたおきやあ心配ねえだよ」

樂觀にもほどがあると思つたスマウの意見だつたが、あながち外れではないのだろう。

「あ、チョウチョー！」

直ぐに他へ興味が移つてしまつのも、順調な回復の日安らしい。

「微笑ましいですね」

呟いたゼオンを縁側から見つめていたスマレは、そのゼオンの様子を微笑ましく思う。いつからかは分からぬ。けれども最近、ゼオンの様子がおかしかつたのは確かだ。何かを考え込むようにしていたかと思えば、ため息ばかり。

実のところ、スマレは人を保護するために場所を提供しているだけであつて、インギアの活動に参加している訳ではない。

「何だかうれしそうだね、スミレ」

「あら、シホナちゃん。今日は天気がいいのに……大丈夫なの、外に出て」

「うん。直接日光に当たらなければ問題ないよ」

日傘をさして、黒い手袋をはめた、人形のような彼女。その彼女に付いてきた、暗い表情の青年が無言で、店先に花を置く。

「カスミ草。今年も可愛く咲いたんだよ」

誰も知らないだろう。この街に花屋が存在する事を。そして花に囲まれた住まいが存在する事を。

機械に埋もれ、その機械に恐怖し、そして枯ゆくこの街の人間は、誰も知らないだろう。自分達の住む街に何が起こっているのかも分からず、ただゲーム感覚で、いたずらに人を落としめているようなこの街の人間には。

「これから、この街はどうなるんやろなあ

「さあ。でも、僕達がやれる事には変わらないよね。信じてれば、世界だって変わるよ！」

「そつならええんにね」

紫の花。董をあしらひ白い着物の彼女は、薄く笑うばかり。

世界を変えられると本氣で考へてゐるツェナを、少しうらやましく思つてゐた。彼女には、明るい未来が見えてゐる。けれどもスミレに見えるのは、そこにたどり着くまでの苦難。

「確かに、そつなるまでは大変だらうけどさ……」

スミレの考へを呼んだかのように言つツヨナは立ち上がり傘越しに空を見ながら、幸せそうに、心強そうに微笑んでいた。

「大変だからこそ、僕らがいるんだよ。皆がいれば大丈夫！ なんてね」

太陽に愛されなかつた少女。その代り、彼女は強かつた。身体能 力的にも、心にしても。

「ガゼローフ、帰ろつか

「……ああ」

洋々と帰るツェナ。その隣をゆくガゼローフ。彼の表情はいつにもまして暗い。それでもツェナは変わらないだろう。彼女がいる。それがガゼローフにとつては大事なのだ。ただそこにいるだけで、彼はたぶん救われる。

人形の様に汚れなく、一点の曇りもなく美しい彼女がいれば。

コンコン、と咳をしたルークは、大きく息をついて、かつては父が座していた場所から街を見下ろした。

人形狩り。インギア。ジャック。

この街に住んでいる人間の何人が、事の重大さに気が付いている

だろう。たぶん、誰も分かっていない。現実味がない。平和ボケをしている訳ではないが、この街はどこか可笑しい。

街と住民。住んでいる世界が、そもそも違うというような感覚。これは前街長が全てをひた隠しにしてきたせいであるとルークは思つていた。

だからといって、今さら隠してきたことを曝け出したとしても、誰も相手にはしないだろう。若い街長が何かおかしなことを言つている。そんな馬鹿な、と。

だから、全ての長でありながら、ただの人でしかない、ルーク。

「どうしたら変わる？」

街に、自分に問いかける。

不安要素ばかり。どうしてこんな街になってしまったのだろう。なぜこんな街になつたのだろう。

全ては八十年前の戦争から始まつた。あれさえなければ、人形も、人間もうまく生活出来ていたのかも知れないのに。

「げほつ」

また軽く咳き込んで、ルークは椅子に座り直す。

まずはジャック。彼を何とかしなければなるまい。彼は一人。会話で解決できるなら、それに越したことはないのだろうが、それは難しいように思える。あの日見た彼の眼は、誰の言葉も聞き入れないような赤。

「……けほ」

決定的な解決策が見つからない。ルークは唯、書類を見て、小さく咳をするばかり。

べつして、だらう。それは急に思い出した事だった。

『お前にだけは教えてあげる、これが私達の最後の希望

それはママに手を引かれて連れて行かれた場所。この街の、はずつとずっとある場所。

『もし、もし、このまま、ママがいなくなったら、お前だけではどうにもできなくなつたら、これを使つのみ。でも、これを使つたら、お前も生きてはいられないかもしれない』

ママ、僕は人形だもの。最初から生きていらないんだよ。僕は僕のまま大きくなつて、普通にしてもママより長く生きるんだ。だから、僕はいつか、本当にこれを使つ日が来るんだと想つてた。

自分が壊れてしまいたくなつたその日、使つんだと想つてた。

でも、そりじゃなつて、ママには分かつたのかな。

誰もいない暗い路地裏。例の端の上で、ジャックはぼんやりと目を覚ました。いや、人形である彼に、目を覚ました、という言葉は当てはまらない。彼はプログラムの起動を終えたのだ。

何十年も後に思い出すように、凍結させていた記憶という名のメモリ。それを解凍したジャックは、視線を下へ下へと落とす。

それは、最終兵器。地面の下から、街を滅ぼす物。

「……」

人間そのものに見える手。人間みたいにくるくる変わる表情。人間のように考える思考回路。人間と同じく起伏する感情。

全部、なくなってしまえばいいのに。

そうすれば、母親恋しさに苛まれる夜なんて来ないのに。人を殺すこと。そんな最大限の刺激で押されてきたものが、もう抑えられなくなつてきている。

最大限の刺激も、回数を重ねるたびに薄れていく。

「こんな世界、壊れてしまえばいいのに」

僕を生んだ、こんな世界。僕からママを奪ったこんな世界。幸せと不变の繰り返しを勘違いしてゐるこんな世界。

「全部、壊れればいいんだ」

兄さんも。

そう思つて、ジャックの手が止まる。彼は、ゼオンは何をしたいのだろう、と。

自分がそうであるように、ゼオンにも何かしらのプログラムが設定されているはずなのだ。彼はそれに沿つて行動しているはず。それが何なのか、ジャックには分からぬ。

ゼオンは、ジャックの目的を知つてゐるのに。

「……」

自分の邪魔をしたような事もあつた。インギアとか言つ組織を立ち上げて、街を守ろうとしている。けれども、それが設定されたプ

ログラムに関係あるのかが分からぬ。

人形には通常ありえないが、インギアの行動が彼の個性なのだとしたら。

「兄さんは、何をしたいのぞ」

鼻で笑つてみても、何も始まらない。だから。

だから今日も、誰かを殺しに行こう。そしたらきっと、彼は来る。あの黒い髪の技師を追いかけて。

「だあかあらあつ！ それは俺の勝手だつて言つてるじゃえか」

「いいえ。ものこぼれ度があるんですよ、スゴウ」

腕を包帯でグルグル巻かれているスゴウ。そしてグルグル巻きにしてるゼオン。

「またやつてるよ」

「あれは仕様がないんだよ。意見のソオイってやつ」

「相違だよ、ティオ」

たまたまゼオンに絵の描き方を教わりに来ていた、ユキとティオとアーク。

驚異的なまでのスピードで回復を見せるアークは、すでに普通に会話ができる様になっていた。時々、単語を思い出せなくなるような事にはなるらしいのだが。

「最近おかしいんだよ。街の連中も、人形狩りも、ジャックも。様子見にいつただけだつつの」

「じゃあ、なんでこんな怪我をして帰つてくるんですか

「……枝に引っ掛けたんだ」

「これほど深く鋭く皮膚を避ける枝なら見せてもらいたいものだ。
そつ思つほどによく切れている。」

「大体、想像はつきますがね。……大方、ジャックのところにでも
行つたのでしょうか？」

「う…、あ、ま、まあな」

少々立腹氣味のゼオンの様子をうかがいながら、激しくうるた
えるスゴウ。ゼオン相手に隠し事ができると思つていてるのだろうか。

「……ちよつとかわいそつだよね」

クレヨンで画用紙を塗りつぶしながら、ぼそっと雪が呴ぐ。同じ
ように一心不乱に画用紙に向かい始めたアークは何も返してくれな
かつた。

「かわいそつていうか、身の程知らず？」

「おい、聞こえてんぞ、ティオ」

輝かんばかりの笑顔で言つたティオを、スゴウの千里眼が睨む。
それを奇麗に無視して、ティオは、それが何なのか分からぬ謎の

生物を描き続ける。

軽くため息をついたスゴウは、あきれた表情のゼオンが入れたお茶を受け取る。

「全く……無茶はしないで下をこと書つていいじゃないですか」

「個人的に無茶してゐつもりはねえんだけどな。俺だつて、出来ねえつて思った」とほやらねえよ

「本当にですか……？」

「信用ならない。怪我をしてしまつてゐる時点で、無理をしているようこしか思えないのだが。

「無理してない。これぐらいで無理してゐって言われたら、人間、なんもできねえって。死ななきやいいんだ、死ななきや

窓の外に視線を向けるスゴウ。だが、本当に死ななければ何をやつてもいいんだろうか。ふと浮かんだのは、ガゼローフ。死んだように生きているのは、無理をしているといつ風にとらえていいのだろうか。

「といひでせオン」

「……」

「ゼオン?」

「……はい?」

「具合でも悪いのか」

「いえ。私は全く。少し考え方を」

薄く笑つてみながらも、やはりどこか抜けているような雰囲気に、
スゴウは何も言わずにお茶をする。

ジャックとゼオンが顔を合わせたあの日。あの日からスゴウは、
普段以上にゼオンを觀察し始めた。別に敵としてどうこうという訳
ではない。彼の様子がおかしい。けれども、彼は話してくれないし、
自分からもきけない。外から見るしかできないのだ。

ここにきて、ずいぶんと臆病だと笑われるかもしれないが、彼は
特別なのだ。それは彼の整備をしてみてよく分かる。

スミレの花屋にも、機融人の身体検査のような形で、腕や足など、
体の部位の整備をしに行く。彼らの場合、大体が大戦前後からの医
術として発展した技術、ようは義足や義手、と言つた感じの構造な
のだが、ゼオンは違う。

技師だけではなく、人形師でしか分からぬような、高度で緻密
な技術で作りだされている。しかも、それらを模るのは、鉄や銅な
どではない。銀。大戦後の大地にはもう残されていない、美しく輝

く白銀だった。

部分的に、ごく僅かに銀を使った部品が装備されている者も確かにいる。けれどもゼオンは全てが銀なのだ。

「うなれば、ありえない。普通ではあり得ないのがゼオン。彼は大戦がはじまる前から存在していることになる。それに、本当に人間かどうかも、怪しい。

人形。

「ゼオン、俺、お前に聞きたいことがあるんだよ」

「何でしちゃ？」

変わらぬ様子で、余裕の優しい笑み。出会って頃から全く変わらない姿。達観している意見に、誰もが知らない事を知っている。この街の仕組みも。

「お前、本当は、に……」

「んぎょうなんじやないか？ そう続くはずだった言葉が、響いた爆音に消される。

爆音。それはこの街に来て、今だに一度も聞いたことのない音だ。そんな破壊兵器、この街にあつたことすら知らなかつた。

「そんな！」

ティオとユキ、そしてアークを部屋に残したまま、外にでたゼオントとスゴウの視線の先。そこには黒煙が上がっていた。無駄に高いビルとビルの間から見えるそれは、明らかに常軌を逸していた。

「あり得ない……なぜ今頃、そんなものが」

考えるより先に行動を起こしてしまったスゴウ。茫然と呟いたゼオントを置いて、一人走りだす。

見なければいけない。何が起こっているのか。

「怖気づくな。何のための千里眼だ、てめえ」

自分を勇気づけるように言うスゴウ。彼は新しい真実に触れることに弱い。一度理解してしまえば、触れてしまえばどうつてことはないのだが、それに行きつくまでが長いのだ。けれども、こんかいはそもそも言つていられない。

「ここで引き下がつては男が廃るというものだ。」

後ろを追いかけてくるゼオンの足音を聞きながらも、路地を抜け、

人のうちの敷地を通り、最短距離で駆け付けたその現場にいたのは
……。

「やつぱりてめえらか！」

黒い髪の、切れ目の男。

燃え上がる炎をものともせず、数人の手下を連れて、崩れた建物の前に立っていた。

「ああ、ここには人形が数十体住んでいたと聞いたのでな……旧世代の兵器を試してみただけのこと」

「お前、人形はもういねえっていつただろ！ そいつらは……」

「己の命を長らえるためだけに、人形になる事を善しとした愚か者ども。違うか？」

有無を言わさぬ彼の目。人形狩りの長、ツガサは感情の見えない冷たい目つきで言い放った。吹いた風と、その風にあおられて大きくなる炎。

「違いますね。私はあなたの意見に賛成することなどできません」

気迫、というのだろうか。ツガサの放つそれにスゴウが呑まれかけたとき、追いついたゼオンが、炎の光に目を細めながらも、言い返した。

その彼を見て、ツガサは薄く笑う。

その笑み。スゴウが彼に初めて会った時には想像もしていなかつた、暗い微笑み。見ていて、ぞつとするような。

「そうだろうて。お主には、理解ができないくて当然」

どん、とまた別の場所で火の手が上がる。人の悲鳴が聞こえては消える。それがどういう意味なのか、スゴウは一択答えに行きついた。

誰かの先導で逃げおうせたか、巻き込まれて死んだか。

この街とて、決して人は少なくない。むしろ多い部類に入る。八十年前の戦争。あの時に生き残った生命全ての為に作られた、いわば箱庭。戦場で生き抜いた命、全てが詰まつた場所。

本来ならば、人の痛みが分かる者同士が、互いを尊重しあい生きていた場所のはずなのに。

「人形遣いに飼われていた貴様には分かるまい。人形の貴様には、我々の憎しみは分からん！」

飼われていた。その言葉に、ゼオンが明らかな不快感を表す。

「飼われてたって……ずいぶんだよね、兄さん」

ゼオンが何かを言おうと一步踏み出した時、そいつは炎の中から、炎をまとったまま現れ、そして目の前にいた男を切り裂き、更に切り裂き、薄く笑った。

「ママを、馬鹿にしないでくれる？ カラクリ師風情が

ゼオンとよく似た金の髪。今はまだ青い、赤布に隠された隻眼。手にしたナイフは銀色に煌いている。

「いいね、これ。本当は旧世代兵器なんて大っ嫌いって言いたいところだけど、これよりも効率よく人を殺せそう……ねえ僕にも頂戴よ

「……く、黙れ、人形！」

「あれ？ どうして僕が人形だって知ってるのさ？ あれれ、僕と君は知り合い？」

「…」

たぶらかす様に笑うジャックに突きつけられたナイフ。ツガサは言葉を失い、ゼオンとスゴウは動けない。

「僕、覚えてるよ。君に似た人がたくさんいた者。ママが、滅ぼした人たちの……マツエイって言つんだっけ？」

「……、貴様、たばかるな！ 我々は、ただ巫女様の」

「その巫女様に滅ぼされたんでしょう、君たちって」

「違つ」

「ど二が」

人間なら絶対に出来ない芸当。こうして話している間、ジャックの腕は一ミリも動かなかつた。人間なら筋肉の運動のせいで、静止していることは到底出来ないはずなのに。

彼の笑みは、全ての心を揺るがす。そして、何かを壊す。

振り上げられた剣。彼はそれにはほ笑んだまま。

第十六話・填る歯車 報復の青

ヒュン、とナイフが白い肌を裂く。

「くつ」

何を考えての行動なのか理解が出来ないが、狙われたとあっては逃げるわけにはいかない。ツガサは避けつつ、何とかジャックのナイフを受け流していた。

「ジャック！！」

ジャックを止めようとしたゼオンを、掌が制す。ツガサの相手をしつつ、目だけを向けて、彼は言った。

「どうして止めるの？ コイツは“人形狩り”じゃないか。しかも一番偉い奴。死んだ方がやりやすいでしょ」

そうして一步大きく踏み出す。

それはまるで見せ付ける様だった。自分は、人形だと。

「……っ！」

「「ひいう事だよ。人形を相手にするってのはさ」

ジャックの腹をつき抜けた銀の刃は、ただつき抜けただけだった。彼には痛みもなければ、それによつて制限されるものもない。刺さつた。それだけの事。

「君は何のためにこんなことをしているの？」

心臓に突き付けたナイフは動かさず、貫かれた事も気にせずに、ジャックはツガサに問う。

汗を浮かべながら、警戒の見える声音で、ツガサは答えた。

「復讐のためだ」

「誰の？」

続けて、状況は変わらない。

「……我が一族と、我等が巫女様の」

「 そ、う 」

それを聞いて満足したのか、ジャックはツガサの胸からナイフを外し、何歩か後ろに下がつて剣を抜き去る。

それからゼオンを振り返つた。

「 だつてさ、兄さん。復讐のためだつて。僕と一緒になんだよ。だからつて、仲間」ゴツゴツするつもりはないけど」

止めることがなんて出来ない、といいたいんだらうか。

「 彼の邪魔はさせれないなー 」

「 標的が人形であつても? 」

凛とゼオンが尋ねても、ジャックはさもおかしそうに笑うだけ。笑いながら、ゼオンとスゴウを見やる。

「 何言つてゐるのさ。人形はもう居ないよ。分かつてゐくせに。僕と兄さん。それで最後さ 」

ツガサには聞こえないように、声を潜めた。

やつぱりそうか、ヒスゴウは田を細め、ゼオンの金髪を見やる。人間と同じような柔軟性を持つ、けども人間ではないゼオン。

彼は、それでも人間を守る。

ジャックや人形狩りと同じ様に、恨んでもいいはずなのに。

「僕はこの囮われた世界の命が無くなることを願つてゐる。使えるんだよ、『人形狩り』はさ」

くすくすと笑うジャック。ジャックは、ゼオンに全てを話す。隠す何てことはしない。

それはジャック自身、無意識のことでのことで、ゼオンもそれを意識することはない。おかしな話だが、昔からそうだった。

「ジャック。どうしてこんな事を」

「ママの復讐。それだけ」

「この街の人間には、何の罪もないでしょ?……」

「この下に、皆が埋まってる。こここの奴らは、それを知りもしない。死んだって生きてたって、僕には関係ない。思い知るといいんだ。虐げられて捨てられた皆と、ママの恨み」

全員殺してやるから。炎を背に、まるで悪魔の様に微笑んだジャック。

彼に重なつて見えたのは、ゼオンの父、ゼイオンの姿。

「殺すなんて、言わないでください」

いつの間にか姿を消したツガサ。

消防の音が聞え、スゴウはゼオンの肩を引っ付かん、路地裏を進む。

「やっぱ、人形だったか」

「はい。すみません、騙すつもりはなかつたのですが……」

「別に気にすんな。お前が人形だらうが何だらうが、お前はお前。それでいいじゃん」

いつも通りの笑顔。いつも通りの会話。

スゴウなら変わらないだらうと思つても、やはり嬉しかった。

「会つたときから思つてたぜ、お前人形だらうなつて。体の作り方

からして、人間様のパーティじゃなかつたからな。それに素材にしたつて、大戦前のだし……人間の寿命敵にそれはありえない

俺のジジイは死んだからな、とスゴウは小さく笑う。彼の師匠とも言える技師の老人は、自らの体の大半を自分で作り上げた義体で補つていた。それは彼が大戦の経験者であつて、第一線で人々を救つていた人物であつたからだ。

その老人は、もう数十年前にこの世を去つた。

「そう言つことだ。多分、ガキ共以外、皆分かつてるんじやねえの。分かつてなくとも、たぶんそんな気はしてるんじやねえかな」

それは遠回しな言葉だつた。多分、スゴウは『氣にするな』と、言いたいのだろう。

「分かつてますよ。『イン・ギア』の仲間なんですから」

人形の為ではない、人間の為の組織。でもそれを立ち上げたのは、世界にたつた二人だけになつた、人形の片割れ。自分によく似た人間が殺されるのに黙つていられなかつた人形は、至極人間的であると思う。それは人形という枠に入れては置けないほど、人間然とした人形。

「私は分かつてますよ」

人間が、それほど愚かではないことを。

眩いたゼオンに、スゴウは、ホントかよ。と笑いながら、ただただ石畳の道を走っていた。

人に指図されるのは嫌いだと言いながら、人は結局、誰かの存在なしには生きていけない。それを思い知った日に、彼の地獄は始まつた。けれどももう、その地獄すら、地獄と感じないほど、彼はそ

れにのまれていた。

たん、と響いたのは、包丁がまな板に突き刺さった音だった。

「ガゼローフ？」

日の下を歩くことのできない、白の人形姫。ツェナの声に、ガゼローフはゆつたりと顔を上げた。

「どうかした？」

「いや」

何を考えていたのかすら思い出せなかつたのだが、良い事ではないのは確かだ。空虚な時間だつたには違ひないが、それでも手は的確に動いていたらしい。最後、まな板に包丁を刺すまでは。

「困つたね、ガゼローフ」

「え」

「なんだか困つてるよ、ガゼローフ」

そうだろうか。そう思いながらも、彼はまな板に刺さつたままの

包丁を引き抜き、貫通しきりらずに穴が凹みができるてしまったまな板を水で流す。困っているだろ？ か、自分は。

余り長い間、様々なことを考えていて、結局は答えにたどり着けやしない。何年も、繰り返し、繰り返し。

「困つて、るか」

「うん」

穏やかな笑顔のツェナを見ていられなくて、ガゼローフは視線をさ迷わす。呆れ顔になつたツェナは庭を見た。

自分とは違い、身体中に日の光を浴びる花達。

「……困つたねえ」

もう一度呟いてみても、ガゼローフ自身が、何に困つているのか、気が付くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4812a/>

インギア

2010年11月4日13時38分発行